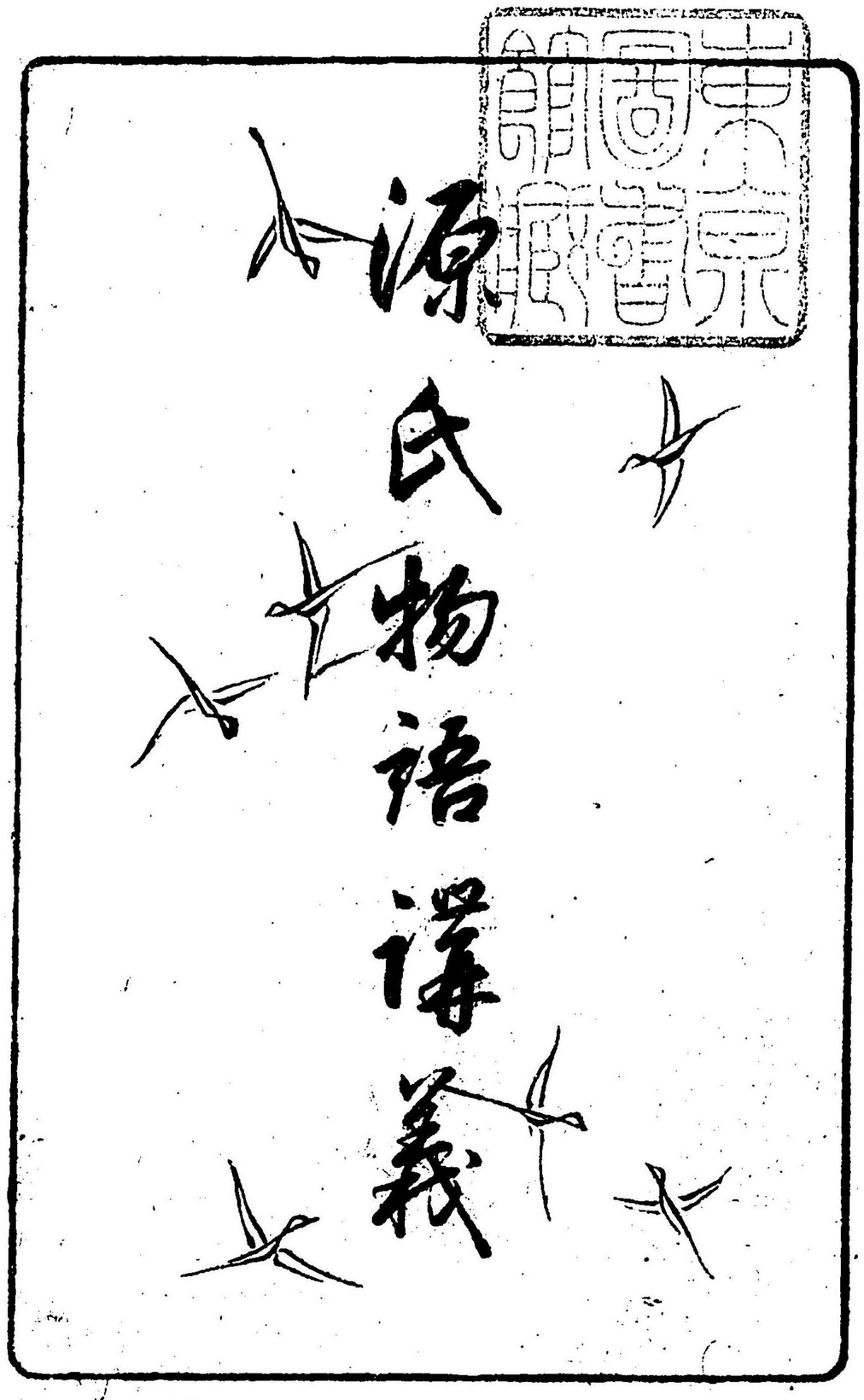
明治十九年一月二十七日内務省納付



源氏物語講義

あおひ

此巻ハ、旧注ニ、源氏十一歳より十二歳の四月までのことなりとあれど、小櫛ニ依て、十二歳より十三歳と改むる。この巻ハ、所謂御禊の日の車争ひのことより、源の君元服延生葵上卒去ニ至るまで、源氏上ニ通ハせ給ふことを叙したれども、なほ葵上の御傳のみ、

段落

此巻ハ、一大段四小段とすべし。まづ一小段ニ於てハ、朱雀院の行幸の初の狀、所謂御禊の日車争ひの

葵の巻　凡一大段四小段四十八節

此巻ハ、葵上のことを旨とかゝれたり。源十二歳より十三歳の四月までの事なり。巻の名ハ、歌を以て名つけたり。二小段の第二節ニ源内侍の歌ニ、「あふひ草のしやくのうぎせるあふひゆゑ神のもるらん」とあるをまちけるに、同月ニ源氏の歌ニ、「うぎしけるかゝるあふひなれどなほ神のもるらん」とあるべてあふひを」とあるはゆゑ、十氏人よるべてあふひを」とあり。さて、此巻ハ、花宴の巻との間ニ、源十九歳の四月より。此一歳の巻ハ、左大臣ハ、朱雀院の受禅。冷泉院の立坊。弘徽殿の立太后。斎宮ハ、斎院ハ、ト定。源氏の任大将なども、この巻ハ、さて、紙省ハ、花宴の説和なるべし。まづ冒頭ニ、用身のやむごとなきもそなはるよりやとあるよりて。源氏の大将ニ任せられしを、「小段の第一節ニ、今后とあるべて、弘徽殿の皇太后とあるべし。さまをあらハし、又ハ、ただ表面をそいと悪しう云ふ」とあるべて。冷泉の巻ニ立のひ、こゝ知るべし。

坊の姫宮、所謂のト定あるべし。「のバ」といふハ、所謂さまるべし。源氏ハ、さまるべし。

恩賜頼大人校定
鈴木治茂大人講義
小串重隆筆記
板河氏義板

あおひ

此巻は、旧注に、源氏廿一歳より廿二歳の四月までのことなりと、あれど、小櫛に依て、廿二歳より廿三歳と改む。この巻は、斎院御禊の日の車争ひのことより、源の君の大臣位に昇進、葵上卒去に至るまでを叙したれども、なほ葵上の事情のみ、

段落

此巻は、一大段四小段とす。まづ一小段は、賀茂の斎院の御禊の日の車争ひの

葵の巻　凡一大段四小段四十八節

此巻は、葵上のことを旨とかれたり。源廿二歳より廿三歳の四月までの事なり。巻の名は、歌を以て名つけたり。二小段の第二節に、源内侍の歌に、

しやくなくのうらぐせるあふひゆゑ神のもるしの名をもちけるかな

とあるに因みて、源氏の歌に、

あづまにはあふ日ぞ多き神山のしるしの杉を人とはなまし

なりと。さて、此巻と花宴の巻との間に、源十九歳の四月より、廿一歳の冬に至るまでの事を省きたり。ぜんぜんの朱雀院の受禅、冷泉院の立坊、弘徽殿の立太后、斎宮の御禊、葵上の卒去、等の重大事件は、まづ冒頭に、源氏の大将の任官、昇進、身のやむごとなきもそなはるよやとぞ思ふ節に、今后と、小段の第一節に、弘徽殿の皇太后となるべきひしさまをあらはし、又たゞ表面をそのまゝ言ひ、あるいは、冷泉の御母藤壺の中宮の立坊のひしさまを、藤壺の御母、桐壺の更衣の卜定あるまでの事情を、源氏の任官、昇進等の記事に、かかることどもを、

馬門真頼大人校定
鈴木治忠大人講義
小串重隆筆記
柳河瀬氏蔵板

ことよりハ、條に息ふハいとく口をしく思ひのふさまを叙し、二小段に於てハ、葵上御悩夕霧の君御誕生、葵上卒去のことを叙し、三小段に於てハ、左大臣殿、大宮、源氏大將、その外の人々葵上の卒去を哀悼みなげき給ふを叙し、四小段ハ大將の君桃園中宮を拜しのたまひ、大將君と上新枕のこと、大將の君大殿へ御年賀、大宮御哀傷の餘波を志めして文を結べり、さて此葵上のうせのほしハ、源の身に何しきことの出来る、

ともかくハ、先桐壺帝の院に御譲位ありて、院となりたまへるさまも、皆文法にして、その省きたる年月のうちにありしこと共をしらせたまふ。さて此巻より澪標の巻にいたる八年間ハ、朱雀院の御宇のことにて、全部を五大段に區別したる第二大段之。然れども御譲位の事ハ、澪標巻の一小段にあれバ、澪標巻ハ冷泉院の御宇の部に入るべきなれど、帝ハまだ御幼年までおはしますゆゑ、御年十一なれバ、なほ朱雀院の御宇に付たり。又次の逢生関屋の二巻ハ、既にいくらかぬく、付録のぬきものにて、源廿二歳より廿九歳にいたる間のことなれバ、朱雀院の御宇中のこと也。因云上の花宴巻に「みかどおりゐさせたまひなんの御心づかひ云々」といひ、又弘徽殿の女御を動詞によろこびあるまじき御位なり」などと伏案を置て、さて御譲位の御式の状をかかぬハ、ことさらとおぼめかして、かきたる物語なれバ之。後の冷泉院及び今上の御世がはりも、此例を用ゐたり。總じて事あはぬことさへ年を省きて、そのことのあらましをしらせたる、作者の注意なることを、味ひてさとるべし。

まづたうじめとハ志られたり、

【眼目】葵の死去志るすべき状を志めせる眼目ハ一小の第二節に「心のかぼそげにおぼれたり」二小の第四節によろめきいできたる」同第八節にめづらかなることにておぼえむ」同九節にまみをいとたゆげに見あげて」同十節にみなる人のゆるべし」とある、又此前後に葵の御悩おどろおどろしきさまなることにてハくく物の怪の状を志めせる三四ヶ所あるが眼目之、同十一節に御息所のいと

世の中かはりて後。よろづ物うくおぼされ。御身のやむごとなさもそふにや。かるがるしき御忍びありきもつつましうて。ここもかしこもおぼつかなさのなげきをかさね給ふむくいにや。なほ我につれなき人の御心をつきせずのみおぼしなげく「冒頭之。御代かはりて源の御威光も衰ふるさまの伏案之○世の中かはりて」桐壺帝崩御朱雀院の御代となりて之○御身のやむごとなき」源大將に昇進志給へるをいふ之○ここもかしこも」六条御息所などをいふ之○おぼつかなさのなげき」源を待つ御方々の歎き之○なほ我につれなき人の御心を」葵をいふ之是より院と后との御間のことをいふ之。今ハましてひまなく。ただ人のやうにそひおはしますを。今后ハこころ

どみかくりゆまきりめ」同十三節より葵の用いらへ物ゝゆえなふもなほいとよるげ」又原の葵をあやしきまでうちまもられる」又葵の源をつねよりハめとゞめてみ先ゝ伏なり」是皆眼目ゝさて葵の死去ゝの心ゝ情よくゝの愁傷の状を志めゝみの眼目ハ同十四節よりくゝうちの人ものゝぞあゝをまゞゞふ」同十五節より用意なるゞもさるゞら二三日ゝゝてすゝりなゝど」同ふいきやゝのゝり移ゝもとゝ」同

なと一おもそハ(やまゝ)やまゝうおぼのもそゝやゝ。うち(内裏)ものゝきさふゝひなへば。立ちらぶ人なうん(山微友の人あきゝ)やもそげなり」。(他ゝ)をりふゝよ志ゝをひてハ。ほ。あそびなどをこのまゝう。世のひゞくゞのりせもをのひつゝ。今の世ゝ(助ゝ)ゝ模しゝもめでたゝ。ゆゞまゝ(ゝゝゞ)をぞいと意ゝうおのひゆ色のふ。ほうゝろこのなきゝ。うゝろめゝう思ひきゝえて。大将(だいしやう)の文よよろづきゝ色つけのふ。ほん。このこゝいゝ(メイワク)ゝきゝ物うゝ。ゝゝとおぼゝ」まゝゝや。ものゝ人の系の用息ふ北ほゝらの前坊の姫ゝ。

十ゝ節よりもこよふ」ととゝぞるきの」。三ふの弟一節より系さきたゝまゝこの」同七節より表する世をひゝて」同十二節より女ハめゝもえ色のるえゞ」同十三節よりほそきゆゝゞより侍れ」同ふよめをもぼりつゝ又なふ」四ふの弟九節よりとゞ須よまりふゝゞりて」同ふよおろのるゞきゝゝるぞあらぬや」と童をとちめたるもゝて眼目ゝ。又一ふの弟六節よりとゝろのほひのりよふ」三ふの弟九節よりひゝりうせぬ」同十

あ(心配)ふいよおのひゝゝふ。大将(ほの)のほんゞゝもいとたのゝゝげるき城。かゝゝを(秋好をさして云ゝ)きさるきほありさほのうゝろめゝさゝよ。とつけてゝゝを(カコツケテ伊勢へ下る)やもれさし。とのぬてよりおぼゝけり。ほよもかゝることるど(シン)きゝゝめゝして。古(前坊ゝ桐帝の御弟ゝ)乃いとやんとるゝおぼゝ(ほ息ふをゝ)ときめのゝひゝものをゝるゞゝうおゝな。べたるさほりてなゝたなるゞ。いとほゝ(キノドクナル)さと。(秋ぬゝ)ふ(院ハ吾みとのめゝ呂ゝとゝ)をもこゝゝゝちのつらよなんもへば。いゞのゝよつけてもおろのなゝらざらんこそよのゝらめ。んのゝゝびよまゝのせてかゝゝを(ぬ色ゝ)きさ

四節よりひのうち志ゐてハ」とあるハ院よりもいくるめく倒の全篇の大眼目なり、

照應

一小段の第一節よりとやゐれ六條の内息ふ云〻」とかき出したるハ下より車争ひのことよりつひよ物の気れとをあらハし、又野宴へうつろひのことを出たるしるくよ照應をなる首尾と同第八節より式アハ宴さきまてぞ云〻」とあるハ下の三小の第十節より源の槿の姫宮へ内女進しのふよ照應をなる柳巷の伏案と又二小

ひざまをるれ。」と世のもどりおひぬべきことなり。なるど院の内ふ事をあ〻られ。ぞ日とのほこ〻ちもげまと思ひまらるれバ。この〻こまりてさらひのふ人のためをぢうのまゐ〻きことなく。いづまをもなぐさらのまゐてなるて。女のうらいるなおひそとの〻さはつをるよ。源々こ〻ぬんのおほけるさ様きこ〻めつけらん時。とおそろしけれ。畏退

一小段の第一節と院代をうて物ごと殺りたるさはの。第ト定のことを叙せ○たぐ人尋常の人と言ふ云てて。要路よ在らぬ非職などの人をいふ詞〻○今后弘徽殿と○内あそび」管絃の内遊と○世のひぐくばり」

の第二節より内車の中より源角信〻よりとを付られのふハ和宴巻巻の五小段の照應よて下の三小れ第七節より既中務と物語〻の内息ふ首尾と又六条内息ふのことを二小の第三節より今ハとそふをれるれりのひちん」とあハ同第五節より桐壺をるれるん」とふ」とあるよ照應又三小の第四節よりの内自ふハ宴の左衛門のつのさよりの殺ひよけれど」とあるも上の二小の第七節より九月よハやどて聖をようろひのふべけ

世のの人も驚くばかりとことばをつくいふ。院ハ御させのひぬれバ人安きさはと○御ばまを冷泉院へ。院ハ御ふよ云〻めて主をとをたり○大将の宴」源氏任大将のこと最よ始てう色てう。若菜巻よ北よ一あ中りて大将兼ねのこと最よ始てう色てう。若菜巻よ北よ一あ中りて大将兼

のふ」とあり○きこをつけ」嘱托しのふ○まことや」やハ強始て院とう色たり○いづのさつけても」内息ふつけても斎ちよ付ても源のおろそのよあるハ知るべのしびと○人のため云〻」院の源よ教へのふ新へこれと條の内息ふの物の常ちらぬ。おなけるさハ俗大膳。源ハ源へよ大饌よも前と。密通のこと源院の内召たらん時ハいのせん。と畏て退出しのふ。

又のく院よもきこ〻めつのこまハそるよ。人の内

名もつとのためもそきこのまういとほまきよ。源のふ之 惟カリ キノドク

いとくやもどるくんくるきをぢよは思ひきこ色のへど。まじあられてそとぢとりて

れど」と云をうけたる
そ尾之、は他二ホの才
五節よくれつゝ「ゆ」
と云て、下よりのそと
なるそれのよ云「三ホ
の才四節よ合佛の
曉ごとなるど思ひ「ど」
と云て、同十四節よそ
ぐろさむき夕のけ
しきなり」同九節よ
「ん」ぐうなてーと
なるどの咲いでたる「を」
といひて、同十三節よ
ひとひの花なるべ「し」、
同十節よくらきほど
なれど」と云て、同十一
節よくれそぬれば、
同所の翁「ぬ」となるぶち
ちつくゝ」と云て、下
よ火をうちなぶめ

なる。夕西のふず。女ものげなきは年の猛をそ
げ「ゆ」うおぼーて。んとけ猛をぬ気色なれば。
それよ志ゝんさこのひしるさ海よもてなるーて。ぬよ
（根帝かはなあるゝ）
きゝーめ「いれ」世の中の人も志らぬはなく
なりよ。（源のふさーのゝ）ふうーしもあらぬはゝろ乃
ぬど弦。いゝいゝいゝ「おぼ」ーなげきゝり」かゝる
と弦きて、源ふよも。あさぐぬの姫之ハ。いのぐ
（内裏所のやうゝ）人よ「にぐ」しとふうおぼせば。（ナヨツトシタ）たゝのるきさ海な
つゝ。（大カタ）ゆうなどもをさゝるーさりとそ人
よくゝ。（フツガウニハ）たるぶもてるーのそぬは金色

ぬ」同四節よ風の
音多よしみけゝうれ「ん」
とひて、同八節よ風
あらくうよ吹志ぐれ
さと志ゝる」同ゝよ
又志ぐれうちして、同
十節よ吹風よつけて
だよ本の坐ゝりけよ
ゆうきゝる」同十二節
よ時雨うちそゝぐぞ
木の葉さそふ風あ
たゝぐーしうゝる」ゝど
あるも皆脇名なれど、
見らの首尾脇名ハ、こ
とごとくあげつくし
難ーよく味ゝひて
さとるべ「し」。

一ホ才三節

「その夜、弁院」は祈院
修とゝもなる。（内代参り）

を。（源）ゝ猛ことなりとおぼーゝる。大殿（葵上のゝ父）よハ
くのゝさゝぶめるき（源のゝ）ん「を」ゝろづきなーとお
ぼせど。あゝりつゝまぬ内けーきのいふひな
けれバよ（源）やあらん。ふうーしもゝ思ん「ゆ」え
猛をび。ん（葵上懐姫ーのゝ）くゝーきさ海のはんちよるやゝ
のひて。物こゝろぼそげよおぼ「い」りめづら
しゝ。（父左大臣母宮なるど大切ゝ）衣と思ひ「ゆ」をのひてうれーき物よ
らたれもゝゆゝ志うおぼーて。さ海ぐのはつゝー
みをさせたてまつりのふ。ゆゝうなる思どハい
とぐ（源）はんのいとはなくて。おぼ（内裏へ疎遠）おこたるると

付例によりて新院に代りのみさまゝ○きさいだいらの」弘徽殿の腹の女御花宴に内裏装束のことゝ一人なるべし、柳に院の腹にて御りのみことゝ見たり○いとゝ見ひ空元」接別に内裏愛あるゆゝ○はぐゝとに御の空を」新院にて俗人と異なる故○とに空ゝちの」別に新院に立すふ姫元なきゝ○まつりの祭ゝ」さだまれるるのに御ゝかに培してをとり行いせのゝ○人ごゝろとゝ色たり」何

ハなけれど。とたえ御目のるべし。二小段の半二節ゝ源と
内息おとゝの院は内面世よかゝれすき狀を志めせゝ○
やむごとなゝ」雑默止ゝ○めてるゝ空色」高貴ゝのハ
ぬゝ○女ゝもげなきに内年」内息所ハ世九戈なるべし。
源ハ世一キゝ○それに御ゝ色に源ゝ源ゝ」内息所の内気
けり」内息所の心ゝ物語の伏案の二ゝ○うゝることを空
のゝ」内息所の上を侍ゝ空のひていゝ内ん
をさめのゝとゝ○あさぎの姫ゝ」桃園式アイの女ゝ。
つひに源に源ゝ源ゝ○ゝそよきゝ見ごゝ人ゝ○さりとて
人ゝゝ」源に源ゝ源ゝ」ゝ人
まハあゝゝぬ内ゝてるゝ」ゝとゝ源の見ゝ○あまりつくま
ぬゝけゝきを」菱上の方に源ゝかゝゝのことを源の深く
つみのゝぬゝ源ゝ怨ゝ」ゝぬゝ○物ゝ
ほそげに」菱上内懐姫の状ゝ○めゝゝゝゝ菱に」源のん
ゝ菱の上を菱と見ゝ○さ内ゝのほつゝりみ」衍禱物忌な
どなるべし○ゝたゝ御目のるべし」源ハ菱の上の内悩ゝ
ごゝにに源ゝ源ゝ。内息ふ
へそ内音多きゝと。その次新院に御りのみのひてき

廿三号五

るゝ人によるとぞと
ゝ○ごけゝの日」新院
をト定して二家の
内裏あり、初名ハ大内
にてあ、さて二家めの内
裏めて紫ふ式の祭宮
に移のゝ」同浄に内裏
ハ必年の月内ハ酉の
日ゝとあり、ふハ二
家目の内裏なるべし
○のんたちあうどの
びさだまりて」延喜式
に、二家の裏の勅使に
ハ、大納言中納言各一
人、参議二人、四位五位
各四人、凡て十二人の勅
使ゝ、これを殺さゞま
るゝ、いゝり、源大将ハ
参議二人のうちなるべ
し、と細流にあり○

さんだらの女三宮めのひめ。朱雀　弘徽殿
とに見ひ空色のゝる宮なるれをまちぢとなり
のふを。いとくゝるゝとおなすたれどとゝやちのさ
るべきおそせびゝ。儀式　常例　ぎゝきなどつねのうんりざなれ
どいうあゝうのゝ志るゝまつりの祭。ゆぎりある
御目やげどに源ゝとおゝゝ。ゝふことなるゝ。
地ゝ人ごゝにとゝ色たり。ごけゝの日。んたちめな
どのびさゞまりてつゝまつりゝ源ゝりざるれ
ど。おぼ色ゝとに源ゝかゝちあるゝぎり。志ゝこのさね
の色。う人のゝ内のゝん。表　袴ゝ　容貌の美なゝ　唐鞍などを用ゝ　染装束ゝ

物語の車に楔を物の車に○一条のおほぢ所へ物の道の人く那集志るる○侍さぶらひ日知ひ侍ひとあり、今の桟敷と○こころくしよ志つくし」めいよ義を尽せる○人の袖口知ー袖とて女房ぞ簾の外へ袖口をあらはす、

一小段四節

○やうの侍ありきに葵上はは人知ー知ーてがやうの物ゑるどもおぼしぬよりて侍懐姫ゆゑ思ーかけざりーと○いでやおのおどち」今日の物ゑをきめきるゑ、糸のへ、とりときたる宣旨まして。大殿の之ゑつ
ゑうまつり給ふ。ねてより物ゑまんづるひ
しけり。一条のおほぢ不すくせ。つけきまで
さらぬぎたり。ところぐの侍ぎこころぐ物つ
くしる志川らひ人のそぐちさへいこぐき
ゑものなり」一小段の第三節と仏徽殿の三の事
葵上大殿はいやはいやの侍ありきゑをさーし給ふぬ
よはいこちさへなやましけれ。おぼーかけざ
懐姫ゆゑ
りけるを。女房達のきくいでやおのおどち。ひきー
のびくゑ侍らんこそえるべけれ。大殿よそ

人だよりふの物ゑよふ。大殿を。ゑ。あやしき
山家人
やまぶ川さへこそまつらんとそれだとはきゐ
妻子
よりめをひきぐつまりでくるゆはらんせ
ぬいとあるりゐるのれとゐを。葵の母
めしてぽんちゐよろしひまるりさふらぬ人
ぐゐさりぐ志ばげるありとそ。よふあるめぐらー
おほせゐるまひてゑ給ふ」一小段の第四節と大殿の
人ー係よ物ゑよのしゐ。
日ゐけゆきそ。ぐー知ゐぐとるらぬさはるそ
いでゐる。ひまるなりたちとうたるよよ
そほーう必きつぐきてちとづらふよき女

ゑ、綱代なのはさこ〜ふるけたるゑ〇ささらよやつれたるけはひ」つぎとや床〜忍ひたる新のあらはあるゑ、見所見わのまゑ〇これはさうゑゑ」床見わ方の人の袖ゑ〇いづうゑゑゑ」何方ゑてゑあきゑ〜泥碎ゑゑゑのハ制止ゑゑきゑ海ゑ、まあらそひのゑとゑ〇物とゑ〜きごせんの人ぐ」奏上方の年功の人ぐハかゑゑせそと若き人ゑをとぐむゑゑ〇新ゑあの所ゑゑ」見

房なおほくて。雑人ゑざうゑの人ゑきひまなおもひさざめて。これさーのけさそる中よ。あづろのさそこ〜なれる志ゑさそこれのさ海などよし由所

ばめるよ。いづうひきいりて。ほのかなる袖ぐち。見ひたるゑ

ものさそ。裾ゑるぐみなど。物のゑいときさらして。汗衫

ゑさらよやつれたるけそひ志ゑくゑゑゑる海

ふゑろあり。これハさらよさやうよさーのけ

るどさべきほゑまゑゑあらべ。とくちごそゑくて。口強

ゑふれさゑうせべ。いづうゑゑゑゑゑき物どゑゑゑひまを

ぎたちさるぎたるほどのとゑ。ゑ志ゑゑめあへべ。制止

八地より云祖ゑのうごせんの人ぐ」ぬ口よりゆゑゑるりて云ゑ〇物おぼ〜みだるゑ」海のうゑ〜〜おそしまひるゑを見ひ丸里のゑるゑぐさめよ物のゑるゑりとゑ〇さそこのりまてハさなゑそせそ」奏上方の人ぐの袖ゑ〜かゑそハさゆうよいそせそと床見所とゑりておとゑ〜むゑゑ〇大ゐ殿ゑ」主ハ所見わ方の人ゑ海の通ひなゑよ大ゐを鼻ニかけて口ごそきるらんとゑ〇人ゑまひ」供車ゑ人よゑひて乗ら

おとれ〜しきごせんの人ぐハぬ〜ゑ〜どいへど。えとぐめあへど。所安の所ゑ〜床息所。物おぼ〜みぐるゑなぐさめよやと思ひて物のゑゑにりつれる。ラズ良スレド。おのづのうゑ歩りぬさだこのりまてハさないそせそ。大ゐ殿をぞおうけ奏家ゑよハ見ひゆらんなどいゑを。その海ゑのあゑゑの人ぐ海の方の人ゑ奏の供ゑ交ゑもすぐれぐ。ぶ。ほとゑるぐうよいせんゑゑづキノドク奏の方の人ゑらしければ。ゑらべのほを川くる。つひよ海息所の人ゑなゑ共たてつづけつれば。ひとゑゑまひのおゑゑよおしやられて。物ゑゑをべ。ところやゑ海息所の人ゑゑきべば

志むる供の女房の糸車に○いとゞうねさきて」物忌の伏案の三に○志ぢ」榻に車の轅をのせる臺に○なのりのどう」胴に車の心棒をとゝり付る糸に○とゝりぬといへ」赤張の行啓なるもとに○さきをのよ云」伊息所の御息所のくるまのよ原をえんとに○さくのくるまよだ」引あに古今よさくのくまひのくま川は駒とめて志ばし水をだよつん」さ伊息所の御息所をだよ志ばし水をだよ志ばしとゞ水をだくれくまよだよあらぬばつれる物まそ。かくるやつまをそれと志られぬるおい。ふいふねさきとこのぎりあり。志ぢなどもられてをぐろなるものどうにうちのけ」をられたるうへろくやもう。なくきつらんと思ふよこのひるもの。もつでるへらんとの」どもとほりいぞんひまもなきよとゝりぬといへぞ。さんひぎよつらきへのほまへとゝりのするくもんやもしやけくのくるまぐよあらぬばやつまるくをぐるのよつけてもやいふいんづくなりげよつねよりもこれみ

志ぢ」物忌の伏案の四に○げよつねよりも」上ゝるのねてより物忌をまんづのひしゝりとゝをうけてげよとゝに○却けうれたるありさま」葵のまの前よ礼をきるをえて伊息所いよくねたまくゝ思ふに物忌の伏案の五に○ちげをのこの家」源のこのげ城えるもみくし川をかけてえに志ばを水をのくゝふとみるぐゝりて源のつれるきよ糸のうき裏りの行ぐ志ち

とゝのへるなどもの源の思ふれもくとのりまぐまたる志ぐぐれのをきはどもゝ。さらぬぐはなれど。源のこほろみつく志りめよとぐめのふもあり。大殿の葵の上志るけれぐ。源マジメニテまめだちて思ふりするふ。源の法供人葵の上の前よ礼をしてるるこんぐうちこのこぐり。ふぐへありつゝゝるゝ。おいけふれたるありさまこよるうおぼふる。伊息所ちげをのくこえくくゝ川のつれるきよ糸れうき裏ぐいくくぐ志らるくと源のこぐるくをゝ人のえるもをくたるけれどめもあやなる源さまあ

るゝと也○「いでたち」外へ出てよく見ゆるを云、
「小ノ第六節」
「ほど〳〵につけて」各〻身分に應じてと也○「ひとゝころの云〻」源一人の光りまし○「大将のかりの御身に」かりに日ごろの御身などと云意也○「殿上のぞうなどのそふる」こそくはなるなるべしと小櫛にもあり殿人のぞうハ蔵人の将監也、蔵人の将監を具するハ恒例に非ざる也○「さらぬ御ずいじん」右近のぞうの外の御随身皆地下人

しきの。いとくしう。いでたちをつくさらましあぶ。とおぼゆる』一小段の第五節之。車争ひの條之。六条御息所葵上方の人に辱しめられのまつさ給を叙せり。ほどゝにつけてさうぞく(装束)人のありさま。いみじうとゝのへたりとみゆるなかにも。上達部(勅使の公卿之)はいとことなるを。ひとゝころの御ひか◎りにはおしけたれためり。大将のかりの御ずいじん(代の人之)に。殿上のぞうなど[の](ぐの保丸)そふることはつねのことにもあらず。めづらしき行幸(ぎやうかう)などのをりのわざなるを。けふは右近の蔵人(くらうど)(定貞六人之)のぞう(将監 源の供したる之)つかうまつれり。さらぬ御ずいじんどもゝ。かたち(容)すがた(姿)

○「まばゆく」カヾヤカシク也○「草木もなびかぬハ」源になびく人の多きをつよくいふ也、
「小ノ第七節」
「つぼさうぞく」市女笠を冠りうちぎぬを着たるを云○「たふれまろび」轉倒之、雜沓の中を争ひて源をみんとする状之○「あながちなり」ハ、あながちに強すぎて見苦しけれど今日ハもつともとこそ見ゆると也○「くちうちすげみて」老人の口つきの見にくき状之○「かみきこめたる」髪もつぼ装束を云

たまばゆくとゝのへて。世おぼえ(源氏之)ことなれのあるさま。草木もなびかぬはあるまじげなり』一小の第六節之。源氏の大将。斎院此供奉志給ふさまを写せり。つぼさうぞくなどいふすがたにて。女ばう(良家の女房之)のいやしからぬや。又あま(尼)などの世をそむきけるなども。たふれまろびつゝ物見にいづるも。れいはあながちなりや。あなにくとみゆるに。けふはことわりに。くちうちすげみて。かみきこめたるあやしの物どもの。手をつくりてひたひにあてつゝみたてまつりあげたるも。をこ(愚之)がましげなるし(賤)

へ下げ髪を表衣の内へ入れて著込たるを。○手をつくりて云〻手を合せて額にあてて佛を拜するなる状。○分のこのきりつくしたるを。佛にも佛にえられまらんと思て。分の限り飾れる。○をこのきやうく。○えもの〻〻の品〻〻を飾りたてたるさまハ佛のんまへ物あらんをこのきうんものぞと。○すべてこの事ハ佛のえいれのふすべきんさへ無恐きるをまして佛の仮まにも通ひ物あるありの〻〻ハ人ありれば

づの夫をすで。おのが我顔ノほのアシキヲ知ズシテ去らで。佛をえて来ぶさまを佛をば去まべき。えせアシキ受領やうのむすめなどさへんの女ぎりはく〻たるをまどもよのりさはとさらび。〻げさうしたるをんをすきやうく〻のこゝろあるりけるまてあくうこまこちしぬなげきまするおほすりけり。一小段の中七節。都鄙の貴賤競ひて物語れさまを叙せり。式部つあきさ機会きまてぞんのひけるいとまばゆきまでねびゆく人のあ

容仲

ものるる。神なるどハめもこそとめのへとゆ大切ニトく知ぶ〻たり。槿の姫矢〻式アの女〻佛の〻ほんをの世人よにぬをなのめるらんまてだよありまてあう志いのでとほんとやりけりいとちの〻て〻佛の〻をんまでハおぼまらびゆるきまを人〻ふきまよくきまでめ佛の〻をえあへり。一小段の中八節。式アの姫矢〻槿の姫矢〻物語しのるさまを。まつりの日ハ大殿まは物をの姫矢物語しのるさまを。まつりの日ハ大殿まは物を孫をび。大殿のの矢。の北の車のあらそひをまぬびゆゆるんをはければ。佛を〻キノドクほうう〻とおぼて。牲あるらおのりあるおそるる人の。葵の〻のもれよなさ

数なるらぬ者の身をなげく人多のりとを〻

小ノ中八節

神なるどハ云〻佛を苦労まてのるふ〻おたちよきんハ神がくしるどよるとあれぞ〻。○すてうしを。何とてかくうつくしき佛ぞと〻。○日のきん〻ハ槿の召使のあるき女房を〻

小ノ中九節

まつりの日。尚日〻酉の日〻。○すねびゆゆる。佛よるの車爭のしを告げ申人あを〻。○すのよなさけおくれて思やりなきを〻俗蔭ならび〻

○ちくしき不ちく」俗一風なるどいふことゝ、未見ふことをまゝ直よすること○かくるなこのらひい。ひハちく」かやうの物ゝの場不なるどゝて、用捨あるべきよ。桑上ハさることも知りのるハぬをそのほゝよちゝひて次くれ家ゝのようのらぬものゝせーとゝならんとゝ○祈ゆのちく」ト定ありて左歩つの住のうゝよ入のべきをさふることあゝてまりもとのゝ薬京極のゆよ知ーまいゝ○さのきのそぐうりよとつけて」神のうこのとつけて若要

けおくれて。ちくゝちきふつきのゝるあすりよ猿づうらいさーも知ぼさでめれど。かるなこのらひい。なさけのハちべき物とも知ぼいゝらぬ法桑のんおきて家ゝよちゝこゞひて。つきゝよのうぬ人のせうせたるなを気質ゝらんすー。法息ふハんたせのいとちげのーくよ由らぬものゝせーとゝならんとゝ○祈ゆのちく」ト定ありて左歩つの住のうゝよ入のべきをさふることあゝてまりもとのゝ薬京極のゆよ知ーまいゝ○さのきのそぐうりよとつけて」神のうこのとつけて若要

所ありておそるものをいのよ知ぼーうむ志温イカルゝよけん。といとほすーうてまうでのゝりけれど。赤ゝ柿のまゝぐもとのゝ知ゝーませぶ。さのきれちぐうりよとつけて。ゆやちくゝもうんめんーゝいぞ。法ゝゝ法息ふをおゝーてゝ知ぼーちぐら。なぞやあ

きゝ○なぞやあゝちく」ドウゾヨかくかど立ゝして、桑ゝ法息ふもちのうゝ知せよ。と法の歌息ーのふゝ、物多の伏柴のゝゝ、

二小ノ才一節

まゝり又ゝは法ゝくふハ法ゝよ紙ふをゝんとゝ○すーのゝれ」ゝゝ法ゝ住のふ方ゝ○女房出たつや」ゝ方の女房童よ法の歌れてのるふゝ○ひさーゝそぎのハちめる」髪そぎを志のゝとゝ○こゝゝみのちゝの世」暦博士ゝ日の吉凶をゝゝせのふゝ○なぞやうよそ

くかゝみよそばゝいのらでおゝせよのゝ。と

うちつぶやくのれのるゝ

『一小段の才九節ゝ法大ね法息ふを訪ひて法ゝを慰めんと志るふゝ。是迄を才一小段ゝ。此段才一節ゝ女のうらみるおひそ云ゝ」といひてさて車争のゝゝ。ゝ条のゝ法息ふけいたく桑上を恨うのゝ状をかきゝたゝ。法ひよ桑上法物の条の為ゝ法悩起り。卒去志のゝ伏寄ゝ。

ゝゝ法ゝ二条殿ゝゝゝるれおそして。まつりうよいで

ゝゝ法ゝのうんゝゝうりのひて。怪光ゝ志のゝと

おゝ世せゝり。女房いでゝりやとの為ひて。姪ゝの

いとうりくゝげゝゝ法ゝくゝひたてくおゝはゝるゝ。う

ちゝてゝんゝまりのゝ。きみ法いざゝまゝ。法ゝゝゝもゝ

ようんゝゝとそ。法ゝのぐくゝのつゝゝようゝもゝきゝゝゝよ

きらきらしくて」ふる方の女房童皆たちでやこの髪のもとをかきたるゑ○うきゆんのうへのたちの中」幸の服なり浮線綾の表袴ゑ○きみのぼぐーい」ふる上の髪ハ添ぶそきなりんとゑ○うたてあせう」髪のあまり多きをいふゑ○いあまはひやらんとそらん」ドノヤウニ行末ハ多く髪の毛生おんとゑ○いと長きくゆもとゑ○て髪のちきんもゑ○おびゆ」一向ゑ○おくれたるまちの」髪のもとその揃ひたるゑ○あまり情つゆゆるをとぶ紀なでのひてひさーうそぎ孫ぶぎめるを。ろくゑいよきき日吉日ゑ。とてこゑみのもとのせめーて。時ともせなどーるゆほどゑ。ぶ女童ゑ房いでねとて。ろらいのもぶぐどものをーげ、なるをはらんぶ。いとらうーげなるこみどものもとそ。もるやうよそぎうもーてうきゆんのうへのもあまよかーれる髪のうちかくれる枝ゑほどけざやのようゆきゑの陪ぐーふるんもとてうて和せうもあるこのれいうよおひやらんとそらん。とそぎうぶーひるゆいとなぶきんゑ。ひ額ひぶみはもとーみじかくぶあめるを。むげよおくれるもぶのなきや。あまり情なるらん。とてそぎてく。ちひろといもひきこ色のゆ少紬をあいれよ、さーいけるーとゑ陪をあてまりる。

陪たまりなきちひろのそこれゑるゆさのおひひもゑ忘れのゑぶのゑんむ。ときこ色のへば。

陪ちひろとゑいのでゑ志らんさーめなくゑちひるゆのくーどけるらぬよ。とものよかきつけてあもるさゑ。らゑーーき物のうち。ゆのうちゑのゑを

すーきゆめでたーとおぼゑ」二小段の才一節ゑ。大ねの矢ゑよ

すゑらん」餅りあぶきやうすのんとゑ○ちひろといもひ」千尋ゑ髪をもすれと祝ひるゑゑ○あれは下の四小段の半六節ゑ四ゑ○おのりるきの色」ゑゑ八海松ゑ髪そぎの洞度の中ゑ海松を一ゑき加るゑゑと孟津ゑ。ぬ、さハ志上のおひひまハ赤のゑぶゑんと添のけるゑ○ちひろとゑもの赤」添の千尋と祝ひるゑをうけていゑ添のふの定めるきをみちひる極ゑたとゑていゑ。さハ物らけー○ら

うらうらしき俗功者ラシキ人ばかの状ニ

三ホノオ二節

馬場のおとゞ左近馬場ハ一条西洞院右近馬場ハ一条大宮ニおとゞハ乙殿ニ左右の馬場まゐ五月の騎射の時、中少将の着坐しるふ人ばかハ一条を東へ通るよ伝て左右の乙殿の後をとゞまる○こゝろやハたいせのゝ御ふ原よばふよ立せのゝぬのこと○いのでおえの人ゐ原の返差ニ如何してかゝるよき場所を得のゝるぞとゝ○たゞのなりやの奇原ほと

原上を伴ひのゝんとしてそ。祭の前日ニ物ゝ手の多きこと

ほぐ〜そぎ志のゝ扱ゐり、ゝ〜ふ不ふ多くたちこみよけり。ゐる場のおとゞの母ごよたてまゝづらひて。上達ゐ北車どふおほくて。物さゝとぶしげゐるゝ〜ゝこのゐる。立ゐるとやさゝらひのゝよよゐゐきゝ女ゐ北原母伝ニいゝゝのりこぼれゝるより。扇をさゝいで。人ゐ原のうゐ人ニをゐゐ母きよせてこゝよやハたゝせ給ゝぬ。ゐ原りきこゝ北ん。ときこゝ色ゝりいのなるゝきゝ物好キニのゐらんと。おほされて。おゐげよよゐ北ゝゝりなれど。ひきよせ原の車をさをひて。いのでゐえ義マシサゝゝさよなんとのゐゝへば。由ふある檜原

扇の端を折て歌を書てゐる左扇のつまゐ紙をりて。

内伝たゐの好ものやの人のうゐざせるあふひゆゑ神のゆる手向ニしの人を待ける。志めのうちよハとあるてゐれおぼ。いづ重ばゐの原なんし北内待北けゐりゐり。あ驚歎ニさゐゐうゐりがゐゐ北けるゐ人ゐ原ゐ内伝ゐ。

内伝たゐ返ゐしゐるニたゐゐ。いまのあゐくゐれとゐくさ

原あゐ〜けゐるんぞあゐゐおほゐゐ八十氏人よなゐてあゐひを。女ニ内伝ゐゐゐゐと見ひゆゑたり。

内伝くゐ〜ゐくゐゐゐゐ〜けゐるゐれ。ゐのゐ〜〜ひとだのあなゐゐゐ氏ゐ。ときこゝ由。人ニ原と原ニとあひ

同年ゐのゐるをゐて人のあゐせゐゐとゐゐ人ニ葵ハ違日をかけていゐり、之ハ祢のゆるしの今日の葵の後を待つるよ、人と同年しのゐゐハこのひちとゐ○志めのうち祭庭ゐハ注連の中へたゐ人ハ入雑きゆゑゐよ人の志めおけゐる原ゐれバとかけていゐゐ○あゐ〜けゐるの奇ハ十氏人ハ多くの人とゐゐゐ。之ハ源の一度のゐ〜ゐゐりとゐゐ内伝ハあゐゐをゐゐゐとゐゐゐ人ゐ違りのゐ、ゐ人ゐ祢葵ゐおけたり○ゐゐ〜ゐゐの

あぎーけるとある
を受ていふ、さハあ
ふひと云ハせのあの
こうして、逢れぬぞく
やーしとこ、人たのめ
ハ人たのまれ、ほの
あハ一夜逢ひーも
くやしとこ、内侍の方へ
奏者をかぎーしも
ならバおりて、源よ逢
たれぬぞくやーしとこ
○いどをーーーこぬ
源内侍と、あの婚姻
のとこ、源ハよさひぐ
しとこ、○物なるならぬ
人、面目なくならぬ
、ぬ面つきく人なる
らぬ他の女房のまゑ、

二小ノ中三節

りをよりふ条の風息ふ

のりてきそぐれをだよあげのふぬをんやまーう
思ふ人おほ（その女房をいふ）ひとひのはありさはのうるふ
（内侍の方へ）逢るらんのりならぶ人けーふハあらじえやと
おーいこりきこゆ。（無興のこと）じどまーこらぬなぎーあら
そひおれ。とさうく（他の女房モマタ）おぼせどかやうよい
とおもるこらぬ人（葵）こと人あひのりのへるよ
つまれて。（チョットトシタ）たのるれいいらへんやたくゆを
（遠まのまゑ）んもまばゆーもー

二小段の中二節。大和物語上と同車して出のひて。

なるなり（ほふ）よそふと源内侍（ほうきの）息ふハかのをおぼーみ

をこ、○ものをおぼ
しみぐるく」車争れ
ら、物気の伏案の七
○ふりたるれ」源よ
離れて伊勢へ、
下の中五節、
○人ならへ」俗よ
ラヒモノ、○ぼりを
るあすの」引あ、河
海よ伊勢の海よ約
するのまのうけるれや
んひとろを定めのね
つる」とあつ、ほんの
定まらぬ思ひのよ
と、○ほんちるる」
ほ身ふの恨ミ灵となる
れバかくいふ、を姫
て物気をあふた

いぶるくとと年ほいよりふおぼくそひまけりつら（ほをう）
きるるよ思ひたそのるど。今ハとそふりたなれ
くぶりのひちんハいとんばそうりぬべくよの
人ぎるふ人ならんとくおぼさりとそ
ちとまるべくおぼーなるはかくこよるき（コノウヘナキ）
さ海よるる思ひくぐきそべのめるふやたそのるーぶ。
ぼりまるあまのうけなれやとおきふーおぼ
しるづらふけるやほんちふうきたるやうに
おぼされて。なやまーう志のよ。大和物語よはく（源内侍息）
（源内侍の下向をとめまゐ）ぐりふんとほやてそるれてあるまぐきとるど

もさはらげやう亜のそびあるどもぬこそやうまう
くおぼしそんもとりなれど。今は程ふ
のひなきてもはらんじそんや。あさのう
深きあらんとこ
ぬまはあらん。とかきこをこのづらひ移へばさど
めのねのるはんもやなぐさむと立いでのへ
りしみそぎ河のあらのりしせよいとどよろ
づとうくおぼしられしり　二小段の第三節。
ひのへさはの。養上は養之大殿ふはものけめきそいさ
悩のさまを紙叙せり。
くらづらひしまへだ。れもおぼしなげくよ。
はありきなどびんなきはなれば。二条院より

とき〳〵そのうりのぶはいとどやむどなき
かさはそよ思ひやを移へるへのめづらしきこと
さへそひのへるはなやこなれば。こそろぐるーう
おぼしなげきそ。こそぶ修法ーうやなるやなどの
方之はうそおぼしおこなそせ移ふのけいき
ものそまなどいふものおぼしおきそ。はのの
のをそる事よへよさらようつらぶ。こみづのら
のはなるつとそひしるさはまそとおどろ
しうづらそー。きこゆることなけれど。ま
さめと時をるるをりもなきものひとつあり。

きげんざ」甚あやふときき修驗者之○おぼろけの物」なみ大ていの物のに非ずと之○大将の君の御かたの人〳〵源のかよひ給ふ所をあれこれおもひあつると云事也○さゝめきて」ひそかに云あひて之○物など」とはせ給ひて之ど」うらなひなどせさせ給ふ之○わざと」ふかき御かたき」よりまし」ようつて根を云恨とてもさしてふかき葵の御あだといふほどの人もなしと之○めのとだつ」のめのとだつ人〳〵」葵上の乳母の死たまひしそ

いみじきげんざにもしたがはず。しふねき気色おぼろけの物にあらずと見えたり。大将の君の御かよひどころ〳〵おぼしあつるに。この御やすん所（六条御息所之）。二条の君（紫上之）などばかりこそは。おしなべてのさま（源の大切におぼす人〳〵之）にはおぼしたらざめれば。恨のこゝろもふかゝらめと。さゝめきて物などとはせ給へど。さして聞えあつることもなし。物のけとても。わざとふかき御かたきと聞ゆることもなし。すぎにける御めのとだつ人。もしはおやの御かたにつけつゝつたはりたるものゝ。よ

の灵、又あるひハ左大臣家に仕へたるもの、左大臣どのに恨ありての霊ならんと也○よわめに」葵の悩にまぎふ折なれバ之眼目之○いかにおはすべきにか」葵の命もあやふきにやと左大臣大宮などおぼしあわて之○いとゞをしげなる」葵の悩のつよく付ても院よりも御とぶらひなどありて盛労のみなれば、いよ〳〵をしき御命ぞと之艸地よりいふ之○世の中あまね」世の人まで皆〳〵葵上を惜むを御息所のきゝたまふにも

わめにいできたるなど。むね〳〵しからず（オモタバシカラズ之）みだれあらはるゝ。（葵上之）たゞつく〴〵とねをのみなきたまひて。をり〳〵はむねをせきあげつゝ。いみじうたへがたげにまどふわざをし給へば。いかにおはすべきにかと。ゆゝしうかなしうおぼしあわてたり。（桐壺之）院よりも御とぶらひ隙なく。御いのりの事まで。おぼしよらせ給ふさまのかたじけなきにつけても。いとゞをしげなる人の御身なり」。世の中あまねくをしみきこゆるを。（灵よりみなのをしむを聞かせ）御息所はたゞならず（六条之）おぼさる。としごろはいとかくしもあらざりし御

〇この殿は大臣と
大殿は左大臣どの
姫君息所の恨むべき
ことなどはさらなり思
ひのけるにぬるとぞ

二小ノ才五節

ほうのようにうりのひ
て姫君息所なども
らねばとて、祈るも仏
法は禁ぜるなれば他所
ようつりて所作法な
どあるべし。〇しばし
仮り住のふる旅所
といふべし。〇外より外
なる云々。源氏物語を附
跡遠すりを附
のやうにまた〇なやみの
ふかの云々。葵の悩たま
ふさまを告げなる
げきのふる〇うづの

葵と姫君息所と挑
いどみごろを。たとうるうりふのなまあらそひ
よ。人の殿ん乃うづきまけるなの殿よりさはで
も思ほしぼりよりらざりし。二小段の才四節へ葵上
姫君息所の悩の状を叙せるを云へ
かるる所もの思ひたるにぐれよ。ほうち狂倒なる
びのにおぼさるれだ。ほうのようにうりのひて。姫君
法などをさせ。大殿
ちるのといとほうにおぼ
り。まんなるらぬるびふるれぐうう思ひ
りおるおるうりなどつゆゆるされぬべくゆを
つげのひてなやみるへ人のほのの殿ようきへ

らはさるも源氏葵
をきのみ深くも思ハ
ねど、親王の前を憚
りて今のほどは葵の
方のにおぼしたるの
〇よろづをうに
思人の跡遠を恨
いで寛恕
いとうれ源の
〇つねよりも
ふくるげなる息
のさはへ〇うちと
けぬあさぼらけよ出
の殿源の息所の
とより出の〇な
ほふりたなれうん
姫息所のに源の
けの姿のをうきを
えのひて、行ふり行
てりのんと紙

源氏物語講義　あ市ひ　十八

夕巨のふ。源氏
おやたちれいと
るーさよ。
よろづをおぼ
とうれうう
りこころぐる
あそれとんそて
けよ出のよ。ぼ
かれなんとぶ
よ。いとぐんざ

源氏
雑黙止之葵の懐姫のこと
やむごとれきこうと
いできたれ

をしくおぼゆ。上の第三節より第五節まで上はうりかるれたるものゝ
いとゝかぼそうりぬべく」とあるをうけて
すほとゝいふ。○かのうつきぬべき」は良和の
くゝとゝ。○「女ぞのりぞ」源を待のよまゆ
ゆゑは女ぞのりぞと
ゝ。○えびきよあで」
引除ることを得ぬ源
又抜ぶくゝそとゝ。○
「あのとうけ」は良和
ハ例の源おかゝうけ
どゝすらんとゝ。○「袖ぬ」
すぐらん。○「袖ぬ」
の系」意訳は濃泥を
かけて男子を自分とと
りなしていふ。まハ袖

ばひ（源の葵の方）とうこゝよおぼ一ぢづまり給ふを。
かやうよ（良和）まちゆ迄つゝあらんもゝのゝつきぬべ
きことゆ。（良和）ゝものゝ思ひの（城ゝ母ゝ）おどろかるゝこゝち
◎◎◎◎。源氏たゝりぞ葵つゝある日ごろ
しのふよほ
ぢらひのまゝ
ぬゝ
とくるしげよたゝ
あるゝ
袖（良和）
つゝこのゝ
よとぞあるほ（源の）

のぬゝ泥深き田と
半分ハ知方おゝ土泥
の中へ入り立田子の
系分ゝうきゝとゝ。○
山のゐのあも」引意細
よくやゝくゝそ汲をあ
ける源けれバ袖のゝ
ぬゝ山の井の色」と
あるをいゝまハ源の
ほゝんぢゝの源きを葵
ゆえめゝおくやゝきゝ
とゝ。○あさみゝやの
系」えぢつハえぢぬる
るゝ。まハ上の系を
うけて源ゝうゝ人ハ入り
立ならん系方ハ分も
濃るゝ迄ゝ源濃泥を
泥をとゝ濃泥ゝ意
訳をかけていゝ。

二小段の第六節

ぐれゝうゝ。とうちゝ（源の）ひつゝ。（源の）いのよそやゝ（マヤ）あ
ま（源の）ぬれゝ（源の）ゝもうゝちゝもとりぐゝよまそつべきゝもなく。
まゝ思ひさゝごむべきゝもなき。（ある世のれより世人あれ）くゝ（源）うゝ（源）おぼ
ぬゝ（源）やいとゝ（源）いのよ。ぬのゝらぬほこのごとゝよなむ。
あさみゝ（源）やゝ人ハ入りゝ川
ぼ川ゝまでふ（葵の外ひ大方ゝ分ぬ）ふ分ゝそ
のほうゝ（うゝ事らぬゝ）ゝ源。うづゝらゝ少迄させぬ。などあり
第五節ゝ源氏ゝ身のゝ方ゝ訪らひ
てゝ。ゝ（葵上）大殿ゝ源氏ゝ
のゝけいゝ。おとりてゝ。ゝぐゝうゝづらひゝ。

こちく物とくの「序」見不の故又云〇刈ひと川の「ほ」見不毛多の上をのこすげきそ人をぬと云下の第十草よ四百五〇あくがる」境不を離ること云〇かう志ろくぐけぬを」このやうふを碎くこふ見まで有のしと云〇有きすのこれて有る」車あらそひよ和と志められしをいふ云〇知こふーようーと」車あらそひの迷恨の一筋よつ心と見ふの狂志づまらぬと云〇知る有るけふや」見える故

この所いき生霊きそぐ庵。こちく和とくの内灵うなどいふ物ありと物よつけて。おぼーつくれば。多和と川のいきなげきそよりほかよ。人をあしのれなどと見ふんもるけれど。物思ふよあくがるなるたましひいさんやあらんとおぼーさらることもあり。とーごろよろづよ思ひのこそとなくきそぐーつれどかう志ろくぐけぬをいふ云〇知こふーようーと」車あらそひの迷恨の一筋よつ心と見ふの狂志づまらぬと云〇知る有るけふや」見える故

よや云〇きこーふうちまどろこのふ」ほ見不まどろこのふ的ハかやうの義を云ふ云〇ひきまきぐ」日本紀よ弄とあり、引き為て嘲弄する云〇けくいのき」猛くいのーきこ云〇ひとふる心一向心云〇刈を きそくや」引き云河海よ刈をきそくいよやきよけん見ふようあるる物ハんるうけりとあを引けり、ほ見不ハ赤んぶうふ刈を離れそ恨の心の義の方へ行けんと見ふをるこふあると云〇まーてこれ」

源氏物語講義　あ布ひ

こうおぼさるるけふやはそこーふうちまどろこ見不の義よハ。よの姫義上云あるよ見不の見の義上のおよりきこそ。とおぼーきく人のいときよりそあるこ不よいきそ。とあくひきまきぐりうつるふるよ。おぼーうこそけくいのきこそぶるごろいできそうちうなぐるなどつ色のふことびあさるるこふりあるこ見不ふんうやげよ刈をきそくやいよけん。とうりーんならびおぼよ色のふをるくるなれば。現心云ーんならびおぼよ色のふをるくるなれば。代人の為ふ善きやうのこをくためはよぐ有のとをーふいひ出ぬ世るれば。まーてこれをいとよくいひなーりべきこーてりなりとおぼそよいと

まして灵になりての後るなどいふ事人の上をよくいひなやむべきたよりなりと御息所のおぼしたる之○罪ふかきらにきこし一向に世に亡き人の死霊ハ我のごとくいひ之○思ふ物を迄引歌之。細流に思へどと思ふも物を思ふなり思ひじとだに思へどやなぞいとゞ。或ハおもひじと思ふ、と将君りしていふ

二小ノ第七節

うちに入給ふべかりしを 近内裡の左衛門の司に入給ふ也之○野の宮ハ嵯峨のあたりの川によりて○ふたゝび

なくしうせ。世にはあるまじくなりてのちにうらみのこるはよのつねなりとぞ。それだに人のうへにてハつみふかうゆゝしきを。うつゝの我身ながら。さるうとましき（アイサウガツキル）事をいひつけらるゝすくせ（宿縁）のうきこと。すべてつれなき人（源氏之）にいかで心もかけきこえじとおぼしかへせど。思ふも物をなり。‖二小段の第六節之。御息所ちはさまぐによみ給ふ。葵上御悩の状を敘せる第三之

斎宮（御息所の女之）ハこぞうちに入給ふべかりしを。さまぐさはることありて。此秋いり給ふ。九月にハやがて野の宮（あまつつき）にうつろひ給ふべければ。ふたゝび

の御はらへ 斎宮諸司に入給ふとき也。又野の宮に入給ふときも御禊あれバ二度の御はらへといふ之○おどろぐしきさまにハあらず 俗ギヤウサンノヤウデハナイガ之○そこはかとなく 俗テキハキシナイデ之○まさるかたの 此葵上の事之。源葵上おいたうわづらひの事故に訪ひ来のひそかに御心せはしきさま之

二小ノ第八節

まださるべき程にも也 葵上の御産をまだずと思ひ 程ども之○皆みな人もたゆみ 油断

御はらへのいそぎとりかさねてあるべきに。ただ（御息所）あやしう（恙之）ほけぐしう（シンソコカラ）て。つくぐとふしなやみ給ふを。宮人（斎宮之侍臣之）いみじき大事にて。御いのりなどさまぐつかうまつる。おどろぐしきさまにはあらず。そこはかとなくて月日をすぐし給ふ。大将殿（源氏之）つねにとぶらひ聞え給へど。まさるかたのいたうわづらひ給へば。御心のいとまなげなり‖二小段の第七節之。斎宮御悩の事より

まださるべきほどにもあらずと（大宮の御心）みな人もたゆみ給へるに。俄に御けしき（御産のけしき之）ありてなやみ給ふぞ。

してあるなり之○例のしふねき　執念しき之○めづらかなりと　眼目之、不思儀なる靈なりとおもふ也○もてなやむ　もてあつかひ悩む之○さすがにいみじう　いみじうてうぜられて　さばかりしふねき靈なれども験者によりていたく調伏せられて物を云之○されば云々　験者共よりいのりふせられて物のけの云べきことあるならんとぞ云之○むげにかぎりのさまは　葵上一向にもはや限りと見ゆるなれば源に遺言しのこともや、と左大臣及母宮方は少し退きたるなり之○かぢ

いみじき御いのりどもかずをつくしてせさせ給へれど。例のしふねき御ものゝけ（御息所の靈之）ひとつさらにうごかず。やんごとなきげんざども（貴き験者共之）めづらかなりともてなやむ。さすがにいみじうてうぜられて。心くるしげに（葵上之靈のさま之）なきわびて。すこしゆるべ給へや。大將（源氏之）に聞ゆべき事ありとのたまふ。さればよあるやうあらんとて。ちかき御几帳（葵の側ちかき之）のもとに入れ（源氏之）奉りたり。むげにかぎりのさまにものし給ふを。聞えおかまほしき事もおはするにやとて。おとゞ（大臣之）も宮（母宮之）もすこししぞき給へり。かぢの僧ども聲

の僧ども也　加持の僧共かぢをやめて法華經をよむ之、

二小ノ第九節

……見まつり給へば　源の葵をとこの定○御腹は云々　葵上は懷姙ゆゑ御腹のふくれて高き之○よそ人だに　他人なりとも……ましく源の心中いかと之○をしうかなしうは　葵上のさまをのべて……之○白き御ぞ　産婦は白き衣を着る例之○こちたき　多き之○ひきゆひて　うちそへたるは　髮を引ゆひて御ぞにそへたる之○かうてこそ

しづめて法華經（ほけきやう）をよみたる。いみじうたふとし。

『二小段の第八節之。大殿まで……（葵上御悩の狀を敍せる所四之）』

御几帳（帷之）のかたびら引あげて見奉り給へば。いとをかしげにて（○葵の上御いたはしげ之）。御腹はいみじうたかうてふし給へるさま。よそ人だに見奉らんに心みだれぬべし。ましてをしうかなしうおぼすことわりなり。白き御ぞに。色あひいとはなやかにて。御ぐしのいとながうこちたきを。引きゆひてうちそへたるも。かうてこそらうらうじげになまめきたるかた

葵上のかくをかしげな
る有様を源ハ初て
見給ふ也○例ハいとわ
づらはしく」葵上日
頃ハ源ニ恥しくて物つ
ゝましう思ふを物の
気のそひたる故ニ葵
の上ハ常のさまにか
はりたるさま也○
いとたゆげに見あげ
て」葵上源の御かほをよ
く見たる目付の体也○
うちまもりきこえ」葵の源
を見つめて泪をこぼ
させ給ふ○くちをしう」
名残ををしみ給ふさま
やと也○なにごともい
とかうな思しそ」葵上本
心にてかくあるくならぬ
んことを悲しく思ふな

うそひて。をかしかりけれと見ゆ。御手をとらへ
て。あないみじ。心うきめを見せ給ふかなとて。も
のもきこえ給はずなき給へば。例はいとわづらは
しくはづかしげなる御まみを。いとたゆげに見
あげてうちまもりきこえ給ふに。涙のこぼるるさ
まを見給ふは。いかがあはれのあさからん。あまりい
たうなき給へば。心くるしきおやたちの御ことを
思し。又かく見給ふにつけて。くちをしう覚
え給ふにやと思して。なにごともいとかうな思
しいれそ。さりともけしうはおはせじ。いか

ふにやと源の推量し
てのたまふ也○けしう
ハおはせじ」是程ハ
あるまじ病也やがて
よろしからんと也○い
かなりとも必ず」ある程
源の詞也どのやうな
ことありとも後世ま
でも夫婦の名ハ絶まじ
と也○ふかきちぎり」
親子の契ハ一世と云な
らハしなれど夫婦ハ
絶まじと也○身のう
へのいとくるしきを」
調伏せられていとくる
しきを調伏をやめ
のよとて源をよびしと
也○なげきわびの歌」
意さうひハ四段をこ
俗云下まへ之俚俗よ

りともかならずあふせあなれば。たいめんはあ
りなん。おとゞ宮なども。ふかきちぎりある中は。
めぐりてもたえざなれば。あひみる程ありな
んとおぼせ。となぐさめ給ふに。いであらずや。身の
うへのいとくるしきを。しばしやすめ給へときこえん
とてなん。かく参りこんともさらに思はぬを。
物おもふ人のたましひは。げにあくがる
ゝものに
なんありける。となつかしげにいひて。
なげきわびそらにみだるゝわが玉をむす
びとゞめよしたがひのつまとのたまふこゑけはひ。

下まへのつまをふればみの留まるといふをとめしなるべし。今の世俗にもよくいへる事也、「其のことは歌ききてこころを魂をぬけ出て空で迷ふ魂を結び留めよ下まへのつまと也、

二小ノ第十節

あさましう人のとかくいふを」あさましとは驚歎之御息所の霊之人のとかくいふ也。よからぬものども」卑しき者どもの云なり。さるまじきことなれども云なり。やうやう御息所の霊之と云なり〇うとましうなりぬ」俗アイサウガツキルと之〇たれとこそしらね」原巳

の人にもあらずかはりたまへり』二小段の第九節之。物の気いひつづくる詞を叙せる也。

りたるさまなり。葵上御悩の物気を叙せる也。五之巻にも、かくまゐりこんともさらに思はぬを」とある八。上の第六節に引ひと、つのうきなげきよりほかに人をわるしなど思ふこころなけれど、もの思ふにあくがるなる魂は、さもやあらん」とあるに照応せる也。されば、げにあくがるる」とある八引出て云あらはせし也。上をうけてげにと云なり。

やしとおぼしめぐらすに。ただかの御息所なり
けり。あさましう人のとかくいふを。よからぬ物ども
のいひ出ることも。ききにくくおぼして。のたまひけつをめ
にみすみす世にはかかることこそはありけれと。うと
ましうなりぬ。あなこころうとおぼされて。かく
のたまへど。たれとこそしらね。たしかにのたまへ」との

ざと宣おぼされてのたまふ也〇よのつね也」いふまでもなき事也〇人々ちかう」葵の傍へ人々の参る也〇かたはらいたう」葵の物のけのいひやむ也〇御声も」物のけおさまるやと也〇物のけおさまりたるひまに也〇宮の御湯」大宮前より少し退きの給ふよしあり。今は湯もて参りまかえおもゆのことなるべしと云へり〇人にかりうつしたまへる」よりましにかりうつしたる也〇ひらかに」事なりはてぬれば」平産まで胞衣などのこともすみし也

のたまへば。ただそれなる御ありさまに。あさましと
は世のつねなり。人々ちかうまゐるも。かたはらい
たうおぼさる。すこし御こゑもしづまりたまへ
れば。ひまおはするにやとて。宮の御ゆもてよせ
たまへるに。かきおこされたまひて。ほどなくうまれ
たまひぬ。うれしとおぼすことかぎりなきに。人に
かりうつしたまへる御もののけども。ねたがりまど
ふけはひ。いとものさわがしうて。のちの事また
いと心もとなし。いふかぎりなき願どもたて
させたまふけにや。たひらかにことなりはてぬ

○山のざを「嶽山の座主」○ちうぶの法師「次よいまふさうとも」と申ばを「次よまづ奥あり」をらいへくまづ安堵したるとうまうして油断の間に葵上死去の伏案○これくゝゆるべ「眼目」葵上悩方あんしたるに○うぶやしなひ「産夜のとき」○夜どろよ「三ヶ夜五ヶ夜などの間」そひしうめしきさまに○なをとこまうてさ「ほ者延生しのるハとよ男よりてますぞとに」ほかまうて始めて男とかきたり見タ者方云

れば。山のざをまうよくれとやむ（貴き験者の僧）ごとなきき僧ども。
おろかにおぼしよあせおいのぐひつゝいそぎまいでぬ。おぼくの人乃（葵の法師より）をつゝしつる日ひのなごりまでうちやをみて。いまいまさりとおぼしおぼしたる僧法などハみゝをとめそへさせる人ども。
づいけいあり。めづらしきほのしづきまられ人。
んゆるべ。院（桐帝之）をいとめてまつりてみそぢちうんざちめのこうなきさうぶやしるひどものめづらしのよいめしきなり。夜どろよんのくしるをとこまうてさへおもをれば。その間どのさほうまぎらくく

廿四号九

二小ノ身上事

かくるほありさまを」葵の平産をふのひそく○ひらこのよる」平産するあるまとゝ姫みのふく○あやしうとられるあらぬ」ほ息ふ式祈のあやしきんちをやしなれむく○ほそるどもたゞけのこのは」濃摩の煙よ志たるとく邪気の護摩ふ芥子をたくかよほ息ふの衣よまれるく○ほのをる」髪あらくく○人まのふべきとあらねば仏人まのくしのふとあるよく○いとぐほこゝろのそうは」ほんめでたし」二小段の第十節ゝ夕葵の姫誕生志のふ

さまを叙せり。さてはほうろこび事まそくく油断のさまを志めせるふ葵上死去の伏案なり。このの姫をどころはゆるほありさまをゆのひてふたぐ（ほ息ふ）ならびゝのひてはいとあやうく少臣しをひらうるまそくとうちおぼしくり。あやしうとれるあらぬほんちをおぼしつくるほどなどふたぐたしのよ志くくりたりあやしきほゆるまるほどきこのくなどしのひてくろくのくどなほおれとやうよのくあれば。ふ身なるのちだようくとまうおぼさるくにぶしてくのいひ思まむとなるどくまのほべきとならぬばんひとつ

のうちるゝは息不物
此気よりのゝるさ
まのふのゝ如ゆゝ
○あさまし〜のうち〜
は息不の灵のとゝ○い
と祓へよけるは息
不へ之〜く妻なるれ
バ恨ミのゝんのとゝ
○まゝけちかゝて
ゝゝてまつらんい
蓬面あらんハ何とな
くんよのらばゝ
○人のためいとほし
う」は息不へあまりよ
妻なるまてハ又妻のた
めよいのゝごとそ又を
のうゝ〜のゝ

二小ノ第十一節

ゆゝびなげ」人ゝく油
断なくゝ○倒のさ酒

よ知ぼ〜なるば〜ゝ。いとゞ此ところおそりは
りゆく。」大物忌ハ
ま〜のうゝ〜ほどの
知ぼ〜ゝられつゝ。いと祓へよけるんゝ
まゝけちかゝて
ゝゝてまつらんは。いのよぞや
ゝて知ぼゆゝびきを。人の此ゝめいとほしう
ろげよ知ぼ〜て。此ふゝばなりぞありける。二小段の第十一節ゝ。六条は息不のさ酒を叙せり。妻上死去の伏案の二なり。いとゝらづらひのひ
人の此なるゝ。ゆゝしゝろゝゆゝびなげよ。左大臣たれ
大なるゝ
は知ぼ〜れバ。ゝとらうて。此ゝ息不へりなるゝ
ありきは

妻上本性よ如のゝ
まゝつぬのさ酒よて
源よ第面考のハぬゝ
○第六のうゝ」夕雾
のゝ〜ちうゝく〜き
ゝ○ゝとあひたるん
ちゝて」ゝ天硬生あ
りて左大臣ゝのん
ゝ○さゝのうゝ〜ゝ
ゝうゝ〜なゝう」大な
の此悩の後なれバさ
ゝのうゝとみよハ此平
金ゝなきゝつゝと妻
ぼゝて〜ゝ○いのゝの
ハさのゝ〜ゝ」左大臣ゝ
さほゝよんゝ配ゝ
ぬさ酒ゝ見ゝ油断の
状をいゝ上よ照ゝ
○まゝづ意ゝう」夕雾
の冷泉よ似なるを

ゝいとなやまゝ〜げよのゝ〜ゝうまゝ〜ハ。俗のさ酒よ
てゝまゝゝたんめんゝ〜ゝるゝ〜ハ。ゝ天のいとゆゝ〜き
まゝで人ゝ色なるゝ此ありさ酒をいまゝらいとさ酒と
よゝてゝ〜づきゝゝ色のゝさ酒ゝ知ろのなゝ〜ハ。こと
ゝ知ひなるんちゝて。おとゝぐゝゝろゝれうゝゝ〜ゝと思ひ
ゝゝ色なるゝ。たゝ妻上のゝ此ゝちゝおゝとゝうゝてのゝハぬ
をんゝとゝなゝく知ぼゝせゝど。さゝゝなゝうゝゝ〜ゝこの見
ゝゝ知ゝまゝそゝ。ゝと知ぼ〜て。ゝいのゝ〜ゝ。ゝいさのゝ〜ゝ
ハんゝをゝゝハまゝゝ〜ゝ。ゝ孫ゝハんゝ夕雾ゝ天の此ゝまみのう
りゝ〜ゝさなゝゝの。冷泉院ゝ妻ゝあゝよゝ〜ゝ〜ゝうゝてまつり

見てまづ涙ぐみて書きまへる源の手うつのまへ○うちなどまもる」源の葵よりのもの思ひ○うひごちなどまもる」源の葵よりのもの思ひ○うひごちなどまもる」初て立ちまるをうひごちといふ、はつ花源の久しく葵の方よりありて手角しのもとのようにたちとのもふ○げよたびとのもふ○ひとくまもる」葵の側より居る所のやう、源と葵と共ぬの所中よりて立派よりこゝ立派きるこゝとて、葵の側へ源をいれまもる○なほいとよやげまる」葵上死去の伏案○されどむげよまもる」源

めくるを。こゝてまづ涙ぐみて書きまへる。物られさせのしよりよ。葵のびごとてまもるのもの思ひ。うちなどまもるよりあまりへくまもる。心モトナサヘいぶせさにたゝふなんうひごちなどまもる。葵のもの思ひ。あまりおぼつかなきほどよりやゆ思ひさせぬ。源の葵をあまりおぼつかなきほんのへぐてうちまもる。とうらこゝゆ思ひ人きばげよたぐえとくよえんよりのこゝあるべきことのハとてふ。源の所作を役まもるまもるよりよりちのう集りこゝれぬいて物をどゆ思まもるふいらこゝ時こゝゆ思まもるふ。なほいとよやげまもる。葵の所作をこゝされどむげよまもる人と思ひゆ思まもるこゝ源

葵上の所悩のいとゞあり〜こゝを思ひいでれ〜○ひきこの〜つぶ〜とのもひ〜」物の気の入りて源よりものいひこゝ○いざやこゝ」源葵上よりやべきこと多くあれどこゝ○まざいとよりげよ」葵上のもの思ひこゝ○げまれだこゝ○ほまもるれ」源のたまふこゝは場をのて手れとこゝ○いろちらひもひけん」あやうのことまでいろもひのこゝるとこゝ思ふこゝ、

二小ノ第十二節

いとをこゝ○げまもるこゝの葵のこゝ気こゝ葵

をおぼ〜生つれだ。葵のんちしてゆ〜この思し福のこゝぐもなどゆ思のこゝつれでまもるのむげよいきこゝたこゝまもるやうよおぼこゝ〜ぐもひきこの〜つぶ〜とのもひ〜こゝぐもおぼ〜いづるよんうけれだいざやきこゝ思まほ〜きこゝいとおぼまれどまざいとまもるげよおぼ〜ぬめればこゝそこゝはゆまもるれなどさこゝあれのこゝひゆ思まもるこゝを。いはまもるひ抜ひけん。こゝあ〜思ごりきこゝ思

二小段の第十二節こゝ。葵上物の気の波まこゝい〜ぐこゝ弱りのもまもるさこゝ思。源新〜〜看病ちのもの抜こゝ。葵上死去の伏案のこゝ。いとをこゝ○げまもる人のいこゝこゝよりこゝこゝまれて。みこのなきこゝ気色

上病中のさまをいと
○ねぐるしの云々」養上
は永くの病中は
ても驚も机のつぬ
と云○とし比何ど
を」年比は中のうとの
ぬしを源の後悔
の云何宣も有さ養
なるをとの云々○あ
やしきまで」源は養
をあのぐうちまゆり
てのの云○やのつ
とありをうは」大
のありをうは源を
して云○まぐしつ
るも」源屋をぐしつ
るも云々と思ぐせ
ど云○程やり云ぐ
よく」源養をいく
ば元色よきやうは

まてふしのへるをは。いとらしげよんくるしぎ
なりぬぐしのこうれたるをぢもをくをらくと
かくれる松の目ど。なりぐきまてこゆれば。ほん
比何るをあうのぬとありておもひつらんとあや
きまでうちまゆられ。源の羽養いとまこひ
いとくまこのでなん。のやうよておぶつのをうび
つくをまつらぶうれるべきを。安の源とおいを
るよんるくや。とつくて。をぐしつるもくるき
を。程やりんづよくおぶをして。例のおまふ
るこそ。あまりうくもてるしのへば。養上りの
出五八

養上ありてつぬの源
屋ぬりをの云々○あまりうは養上を
大変あまりうは養上を
をとるきものくやう
よあるやするを
いつの云○つねりうは」
養上源は月をとめ
てのの云又のふ
まぐき完表云○秋
のつのさめ」八月な
り備月を任せ表は
月めしとの云○いる
たりのぞく語は」人く
月の不望ある云は笑
望表のの云○うるひ
きつぐきて」大変のは
見だち引連て美月
しのの云

三小段の
源氏物語講義　あかし
才十四節

養上ありてつぬの源屋ぬりをの云々○あまりうは養上を大変あまりうは養上を をとるきものくやう よあるやするを いつの云○つねりうは」養上源は月をとめてのの云又のふまぐき完表云○秋のつのさめ」八月なり備月を任せ表は月めしとの云○いるたりのぞく語は」人く月の不望ある云は笑望表のの云○うるひきつぐきて」大変のは見だち引連て美月しのの云

てものしの程よぞ。などは月をあきのひて。いとまこよげ
ようちぞうぞきて。出のてをつねよりハめとい
めてのいぶして。ふしるのをつ。秋のつのさめあ
るべきさうぬめてて。大変はまるりのへを。美じもも
いるりのぞく語はりてなどもありて。変の色あるり
のぞくをうれのの云ハ。るをきつぐきて。出のひぬ
養上病中の秋云。源屋の伏業の四云ぶよあやしきまで云云は
つねりうハめとぬめて云云は云などあるハ。養上死屋の伏業をネせる云。
大変云
とのうちくぐるはあやのるる程よ。侍よ例
の四節よりもねをせ元あり
のはむねをせきあげて。いとうるぐひ程よ。内裏
よはせうそこ屋色のよ色とるるくあえいる程

甚苦シム云

ひぬ。あいなくそらよそれもまでは孤ひぬれば。
ぢもくれば夜もすがらけまどかくるとなきはさうり
なれば。くれとやふれるやうすがらのこりさるく
孤よ夜なるのびありなれど。山のざとなるくれの
侍だちもえまうであくるぞいまはさうりとも
おりひるゆこしうつるよあさまうれば。大食の人々
ちの人ものまうぞあるまうまうふぞのはとふらひ
のつまひるどこまうれどえやめこつぐゆそう
みちていまうきはんまどひどもいとおそろしき
までえこるる人〓二小段の第十四節。葵上死去のさまを叙せり。さて此葵上の死者一つの秋ばかり一小段の

左大臣大宮源氏などえ

ヨギナキサシツカヘ

くの叡住どもの更打ちなるまうこ

雑さうれば

大食の人々

○おのおのの所ところにらひ
あるまうこうるまうこの所使
こ○えやめこつぐゆ一
一所ひとりとまうるきこ
○ゆまうこうこちて人
〻動きさうらうぐこ

二小ノ第十五節

因桃などこれこ死人
ハ必ず桃をかうるる
るれど、物の死加又蘇
生もやと桃を隠ぐ
して二三日をるこ
○やうこのうりるふ
とふこ人ねるりて
物うこるまこ下
のつをこ所れとあ
ばるこ○のるまこ
とよるをそへて葵
の魂このとよ自
分の魂のるを添てこ○

第二節よりくるまきさまのほんちりよるやうこのひて物ばそげ
ことかき物して。段節どまつぬのほ病中とかこそでんぼをさのほど
をあらこ。大物のえかまんよ移りてまつうこうこ表とえのこふ。
侍よいよ死者の伏寝。ざく。時十三節より。秋のつのさめ。まて源
氏の大物。左大臣どの。葵上の所兄弟のかく。年角しるふあひ
ぐよ。文まうりのこうるさまるふ。懸表の情をつよあたる葵ぐのひこ。

ちものくけのふこ
ぼして。桃。物。なるどもされぐら二三日こそまつ
りのこどやうこ。ふふ。孤とどふかのあれば。あぎ
りとおぼこまつる日どこれもこいとこぐ大物殿
ハるるこきこるをそへて。葬をいとうきさの
よおぼこ。ちみめれば。ぐるらぬ所あこりのとこ
らひどもこ。こうここのこぐるぐておぼこ

悔よ相撲すまげ」相撲帝まそれは歌さあ
りてはとそひのさ
ま却て面目のとく左
大臣歌きの中に葬ひ
ゆふ〇いのめ〜き
とぶを」大頼術繕
るどせそのそ〇
のりそそなれのよ
とぶ」は骸のえ悪く
者りゆく〇月ひよ
るれを」死去ありてよ
り六七日へてる〇
いそどげるそ墓
あり」は葬送りあけ
てあそれるそと多
きそそ〇

二ホノ才十六節

そるるかるそ」諸ホ
よりのえ送りの人え

（ものは長たる）院なげきそふらひゆ申させのよ
さ海のへりて却ギャウサンたぐしげる後うれきせそま
じ申て。却とぐハ法洞のいとまるそ。人のよ者さ
ずひて。いそ〇きそぐを。いきやそう〇孤ふ
とさ海ぐおるとそく。ふりそこなれ孤ふと
どふのかをみるそつきせびおぼまどへどひ
ゆ者てりひよるれど。いそぐハせんとて。為迎那の
おそそまつる後。いそどげるそと却ふり二小段の
第十五節え。葬上の法骸を
為迎那は葬送せそる。そかなそこの法おそり
の人どふ。てらぐの念佛のそうたなどそそらひろ

〇てらぐ」の諸寺の念
仏の僧え〇そそらひ
ろきそ那そ」廣きそ為迎
那そ充満して不狭き
ほどどよえのそそ〇
ふそそ〜」前高
え見ふたぐてた
らひふて歌き
ふそそ〇そ〜らの
人数多くえ〇つね
のそそるれど」葬送の
さ海ハいつふかくある
そそるれど涼ハかやう
のそ知のそハぬえ〇人
ひとりの」細よ夕負上
を云えとあり涼ハ夕
負のおよハまぐ葬
送のさまをえのそハ
ねぐえ〇ゆぐひるく
そ」よすく怨〜え惜

き那そよ不ふれ〜。院相帝えをバさらすふやそぐ。義孝皇后きそらん
の家。冷泉え其家などの法つのひ。さらぬ不えのふまあり
ちぐひて。あのぐ〜いそ。惣切のえきはそそふらひを少申孤ふ。
却とぐハえそちふあのり孤ハぐ。うそるよそそひのた
ろそよ。そのうくさそうれ子よおくれそそまつりて。ふこ
よふそそ〜たぐちるきすふを。そそらの人うそる
うそうそまつる。ゆふふそそらいそ〜どうのくきり
葬送の儀式え
法るぐ〜れなれど。いそどふたそるるきほこのぐ送骨えハば
ありを法ふ孤ふて。晴ふそくこの人りのふ。つふの
となれど。人えとうの。あまそ者ふ孤そぬそな

ろみやうし、
三小ノ第一節
八月廿余日」源の夕良に別まゐらせしも八月十六日まで葬式なき月の日なれバ有明の月の空を見あたり○のぼりぬる」此歌ハ葵の葬送の煙の行方いづくとしらねどもなべて雲居のけしきの哀なるといふこと、ものあはれなる折ふし此さまなるとなるおぼえられるをいふ之○とのにおはしつきても」源葵上の葬送より帰りたまふ之○としごろの御」葵の年ごろのさまを

れバまして。ひなくおぼしこがれらるゝ』二小段の第十六節之。さて葵上の左大臣殿大宮御歎の状之。是までを二小段とした。さて八月の十四日の夜のことゆゑ何日ともなけれど。葬後の文の上よりしられたり。此所にしるしたるハ葬送八月の廿日過のことなり。

八月廿余日のありあけなれバ。空のけしきもあはれすくなからぬに。おとゞのやみにくれまどひ給へるさまをみ給ふもことわりにいみじけれバ。空のみながめられ給ひて。

（源）のぼりぬるけぶりハそれとわかねどもなべてくもゐのあはれなるかな。とのにおはしつきても。露まどろまれ給はず。年ごろの御ありさまをおぼし

○などてつひにハ」ドウゾシテ葵のうちとけぬさまも終にハみなほさるべきことゝ○なほざりのすさびにつけても云々」葵ニ对シて源が等閑なりしを後悔せらるゝ之○世をへてうとく」葵の心ざはいつもすげなくたづらしきさまなりしこと○われさきだゝましかバ」源の御衣をある妻の服ハ急色の薄きを源が先立ちなバ葵ハ重服ゆゑ濃色の喪服をめし給ふべきものをとの○かぎりあればの歌」こゝハ服忌令などに制限あれバ薄

出つゝ。などてつひにハおのづからみなほし給ひてんと。のどかに思ひて。なほざりのすさびにつけても。つらしとおぼえられたてまつりけん。世をへてうとくはづかしきものに思ひて過はて給ひぬるなど。くやしきことおほくおぼしつゞけらるれどかひなし。にびいろの御衣たてまつれるも。夢のこゝちして。われさきだゝましかバ。ふかくぞそめ給はまし。とおぼすさへ

（源）かぎりあればうすゞみ衣あさけれどなみだぞ袖をふちとなしける。とてねんずし給へるさま。

色の喪服をめしめ
ども、哀しみの心は深
くて、涙を袖をふちと
ぢぬばかりぬらしつ
るとぞ。○河うしよ
りはけるり」法師より
勝れりとぞ。○ものも
ものの文の」引歌の後撰
より撰ひあつめ形見の子
だよりなりせば何よ
思ふの字をつまく」
○かるるるこころさへ」源
ハタ旁を養上の形
えと思ひ慰めるとも

三小ノ弟二節

あやふげよ母君の命
も危ふげなる○ものの
なるべきの」月日のるる
ぞ○明るぞのいそぎ」
七日七日の法事ぞ○

しとぐ涙をめしめ（ほのさまを）さはさりて。種姫（きみ）ひやのよよ
ら法師。ほうのあんさんまんふげんだいどうち（法界三昧普賢大士）
のの人へる。おとろるひなれる（夕旁之）ほうしよりはけるり」。
いとぐ寄るくれど。ものるのこころさへ
あばと。おぼし（母君法しぶむ）
君は去りぬ。いりてそのまま
あやふげよ人を思ひ（人の）
りなどをさせ給ふ。たのもくそぎゆけだ。ほと
ざのいそぎなどをさせのふ。おぼしのけざし

三小段の弟一節。左大臣どの。大弁殿は歌の状なり。

なるのめよのるを」十分
なるべく不具なるを
○人のあや」その不具
の人の親ぞ○まして
ことなり」愛の母君の
歌まはむとぞ○まし
さあぐひこそ」女子の
兄弟もあるせぬぞ○
神のうへの玉」愛子を
あるとへていふ、掌上
珠などいふよあれど

三小ノ弟三節

あるらまは」苟且（かりそめ）、俗
チョットモ○あれば
よんこのく」養上のう
を表れぞ○あるな
ひ」讀経を仏の行ぞ○
不ぐまは」源つよ通
めふるるはは女
ぞのり者しのぞ

ことなれぞつきさせ給いそぐうち」。（比）なのめよかる
ほるるをよ。人のあやいうぐ思ふめる。まして
ことなりなり。まこと多ぐひあるせぬぞよさりく
しくあばしつつよ。神のうへのあのくぐけ多りけ
んよりもあるまきまし」げなり」三小段の弟二節。養上の母大君御歌の状なり。
大弁の天ハ二条の院」まことるも。あるるきはまるも浪
りのそぞ。あるれるんふるくおぼしまげきて。
あとなひをまめよ志のひつなのしらし殆ひ。
不ぐまは法ふそのりそあてまつりのよ」三小段の
弟三節。大弁の天御歌の状なり。けるよ「おぼしまを
げきて」とあれど。湖月おまへ「思ひなげきて」とあれど。

三小ノ弟四節

新古の云〻」題屋、上の二小ノ弟七節より「新古ハ云〻さ〻〻さるとみそ〻は秋いりの」とあるそ尾〻○いつくしきはきよまり」厳重の潔新〻○いと」いとく」厭〻○かくるほ〻ぬ」〻は見まとひのこと〻夕雲をいと〻○ねぎは志きさ〻」源毎心して芸を道れのいんと〻○よるハみ帳のうちよ」源のさま〻美〻と在のひし殿ちぎら今ハ源一人ふしのへバものさびしきはい〻○とのゐの人〻」宿直の女房ちと

今古和よりて改めた　六条　あれ　息あそ。新古の左馬つのつ、いさよいいり孫ひいよけれ。いとぐんりくさ侍き　源と侍息朱　よまりよとつけてきとえ　源　あるひのふびう　くくきはきよまり　さも。ぎべていとそくく　しと思ひ志みよ　なりのへ。かくる　ほ毎ぬ　だよそふざらすこ　ねぎは志きさすま　ものりれます。とおぼそふ。まげさんの姫　源　矣けきうくくそものふ　らんありさ侍ぞ。ふとおぼ　やらるぞるふみ帳のうちよひとり　ふのみよ。とのゐ殿人ぞを　ちのうめぐりてさふらへどこのこいらさびしく

○とき〻もあれ」引歌〻河海よ時〻もあれ秋やハ人よあるべきあるをえるたよ京一きものを」とあるさ〻○こゑそぐれたるあぎ音」声のよき侍どもを○風のおと音よ志み」引歌〻細よ吹よれバ音よ志ものたる秋風を色ある物とおもひくるあるを」とあるさ〻下の音ハ節よ風あらしよ吹て」とある題名〻○きくのけ〻きむめ」菊の咲きめれる〻○ときあ侍よびの記たるべのこき色〻青飽ハ服者の衣の色なれバ同ド色の紙

て。ときも〻あれ。ねぎめこのちなるよ。こゑすぐれるこのぎをえらびさふらえをせるふ。今佛の時ぶいいなどおびぶ。ふのき秋のあそれぎまうゆく風のおとおいまみいるこのれ。とならえぬ侍ひとりねよのうゆ侍へる秋ぼらけ秋雲のたそるさ侍のきりこそれるよ。きくのけきだめるえぐよ。こきあ侍よびけこのみなるふそつけて。さ侍あきていよけり。いまめ侍ふ〻もとそこのへぐ。こゑやきそ不のほ〻ものり。ゆ文相巨ぬ程をおぼ侍きるらんや。人の侍をあそれときくもあなたきよあく

のぬるゝ也○すゞろぬ袖
に赤心のきはまりの
間也○人の世の露」
人の世ハ葵上をいひ、
おくるゝ袖ハ源をさし
たる也、己ハ葵のうせたる
をきゝて露けきに
源の袖をさぞぬらし
給はんと思ひやらる
ゝと也○いうにも」俗
にいへば」俗ニ
ケナゲニマア也○けざやか
也○いとほし」俗キノ
ドク也○人の御名」
御息所の名也、又ハ葵
の死しことをあらはさ
ば、いそぐ名の瑕付(キズツク)
べきとゝ也○さだ〳〵と」
鮮明也、御息所の物の
けなりしを源が確(タシカ)に

袖をおもひこそやれ。たゞ今のそらに思ひ給へ
あまりてなん」と有り。源ハ常よりもいうにも
かきたまへるかなと。さすがにおきがたう見給ふもの
から。つれなの御とふらひやと心うし。さりとて
かきたえおとなふきこえざらんもいとほしく
人の御名のくちぬべきことを思しみだる。過
にし人ハとてもかくてもさるべきにこそハもの
し給ひけめ。なにゝさることをさだ〳〵とけざやかに
みきゝけんとくやしきハ。源のわが御心ながらなを
えおぼし直すまじきなめりかし

三小段の第四

見しを悔ひの心也○
なほえおぼし」云」源
ハ御息所を疎ま
しと思召せど、ヤハリ疎
ましく思召さんと也

三小ノ第五節

斎宮ハ思ひわづら
ひ」源ハ服中なれバ久
しく精和のふ也○む
らさきのにばめる紙」
源よりの御返事ハ服
中なれバ墨こくなる色の
紙にかきし也○御
いましき程ハ」源ハ服
中なれバ憚る也○とま
る身もきえしもの」とまる
身ハ源、きえしハ葵
也、きハ生残るも死ぬ
るも露の如き無常の
世なれバ思ひて歎く

節之。大将の君御歌の返しの條。御息所より御とふらひの事を叙せり。斎宮ハ御きよまハ
りもわづらハしく(メイワク)やなど。久しう思ひわづら
ひたまへど。わざとある御かへりなくハなさけな
くやとて。むらさきのにばめる紙に。こよな
うほど経侍りにける。思ひ給へおこたらずなが
ら。つゝましきほどハ。さらバおぼし知るらんや
とてなん。
源「とまる身もきえしもおなじ露の世に心お
くらんほどぞはかなき。かつハおぼしけちて
よ。御らんぜずもやとて。これにもきこえ

もえのあしこと、下の人ハ、御息所の物のけなるどよ疑のひしをいあきましと教訓のさま之○これまでゞ上の御息所の文詞をうけて、此方よりも指ねて疎まあらしこそ

三小ノ第六節

御のめかし云々」上のありハおぼしけちてよと云詞のさま之○心のおに」人々の善心より後悔なるを心の鬼といふ之○こぜんばう」故前坊ハ桐壺帝の御兄弟へ、御息所の御つれ合之○いみじう思ひかはし」御兄弟の御中らひよくて、斎宮のこと

えのへり』三小の第五節之。大殿の文より御息所へ御返ことあるさま之。少將ようつをといふ人を

つくべし。恨めしくはおぼせども。うつそぞうらみをおぼしけちて思ひ入りたるよし。此說よろし。おつつさハ俗ニ半分ハ之。里におはする程なりければ。しのびて見給ひて[御息之]。ほのめかし給へる気色を。心のおにゝしるく見[サトリテ之]給ひて。されバよとおぼすもいといみじ[○甚イマハシ之]。なほいとかぎりなき身のうさなりけり[御息所の今は後悔なる事を思ひ之]。かやうなるきこえありて。院[○桐帝之]にもいかにおぼさん。こぜんばうのおなじき御はらから[兄弟]といふ中にも。いみじう思ひかはしきこえさせ給ひて。この斎宮の御ことをも。ねんごろにきこえつけ

を帝へ聞えしのひ重ねし之○その御かはり」前坊薨去の後、前坊の代りに御息所を御世話あらんと之○やがてうちずみ」ソノマヽ内裡へ參りてのへと勅命ある之○いとあるまじきこと」自然帝の御心のうけめ事をあるとみてかいときこえせし之○なほ例のさまにもおはせず」御息所ヤハリいつもならず之○心にくゝよしある聞えありて」御息所のうへを云之、奥ゆかしくゆゑよしある評判もとより名高し之○のゝみや」

させ給ひしかば。その御かはりにもやがて見たてまつりあつかはんなど。つねにの給はせて。やがてうちずみし給へと[帝より]たびたびきこえさせ給ひしをだに。いとあるまじきことゝおもひはなれにしを。[御息所の御心より]かく心よりほかにわかわかしきもの思ひをして。つひにうき名をさへながしはてつべきことゝおぼしみだるゝに。なほ例のさまにもおはせず。[然]さるは大かたの世につけて。心にくゝ[オクユカシク]よしあるきこえありて。昔より名たかくものし給へば。のゝみやの御うつろひの

備前より野ゐよ稲
り人のふね○をの
ういまめきこゝろと
おもしろく風流なる
ことゝ○あさゆふの雲
ゐけありくを野ま
ゐ〜に鳥ゐへんよをゆ
ゆゐゝ○ゆゐゐはあく
まで云ゆゐゝしき
方ハ十分なる鳥ゐ
であるものをとゝ○
くだりのひなびゝ世
をうみて伊勢へ下り
めゐぐゝ○さゐゐ
〜〜さびゝ〜〜ゐゐ
と源のおぼけゝ

三ノ君七節

四月四十九日ゝ○三位
中将ゝ所中将ゝ姫て
三位とゝ申たゝ○

種なる。をこのゝうゐまめきこゝるとおぼくもる
して。所上ゞどもの好色めくゝ
ことすゝきなどゝ。あさゆふの
雲ゐけありくを。そのころのやくゝなんもるるど
源のゝ
ゆきめてる。大将のきみゐ（モットモトゝ）ことゐぞゝゆゐゝ
ゐくまでつきのくゝる物を。もゝ世の中ゝあきハ
てくだりのひなびゝ。さゐゐくもあるべきこゝる
とさをぞゝおぼされゝり

三ハ段の第ゝ節ゝ。姫君不後悔しのゝさ。源氏の
ゝ
ゝ
ゝ

かくいひくしてきそくいいのまやいのよならんとそもらん」とあり
さハ世の中のことをいひもてゆけハいとあ衣なるまどろまるまりてうちなのれるふさまもん世の中の無常を感じたるもん

三ノ宮ハ節

おくれうちしてうちハ源氏ハ十月ばかりのまもまて時雨ふる夕暮ん○まび色鈍色ん色のうもきん○衣の」十月の更衣ん冬服ん改むるん○をそ〳〵雄々シクん○かうらん」匂欄ん源ハ匂欄ん依りかくりてん○

三ハ段の第七節ん大将の夫三位中将と内侍督の状ん。けふよりこの内侍督ぞうちひのくくさハひるハ有るめる」とあるハ。おん義父者五ハ段の第五節ん「とあるもそれバとつぶやきとよいひむとのるくさをひるを」とあるハ無ん又「このいさよひのさやかなりざりし」とあるハ末摘花ん「いさよひの月をこのきほどよおいたり」とあるハ。結尾ん「をそくハ帰木の者の面白物語ん思ひたれ者ん「をそくハあやしきことどもなりてあるハ彼の弦尾の文法なり。

直衣指貫

おのの夫まび色のをうしぬきうちこのん衣ぶくしてをくしあざやかんをんぶこのしきさはしてまるおりめん色。源ハ夫ハ妻ハ戸ん

おうらんん

ハあらくうん吹上の第四節ん「ハの和とみよしみるるうる」とあ照応ん○おくれさとおるほど上ん

おくれうちして」とあ照応ん○涙ハあらそふかちして涙ハ時雨とあらそふ紀しての文ん○雨とありまとやありよけん源の吟じのん白樂天同時の人劉夢得の詩ん相逢相失雨如夢為雨為雲今不知とあり○つらう色頬杖ん○女ん夫ハ又すてくうる」やねぬ色の今ん又ん源を夫ん

あまふ程なりはけり。ハあらいこうん吹。おくれ

ぬ。いいたるぼと。涙もあらそふんちして雨と

なりあとやあるとんん今ハおくれとうち

ぬとりごちて。おくつ色つきのんる法ん女

ふんん程てなくるちんあまひ。うるしび

とやあるんうし。と色めのきんん紀ようちま

おくれつ。ちのうん法いるのんれバおとげるう

おみぐれのんるさはあるぶらひ。ひもだのりを

さきなほ。ハ移ふ。これハ入うおそ。こそやん

あるる夜の法なほ。くれあるあれはやく

人女ハ孔雀の魂のとまらぬるゆゑあらじとぞ○ちのうつりぬるのゝれば」中将源の
そゝぐ近く附属のゝるゝ○ちどけなり」ラチモナクゝ○ひるゝのりを」直衣の入ひもを
引つゝゝろひのまゝ、中将よ弟て礼の状ゝ○これハ今まゝ」
ゆやのなる」こゝまやのハ
衣の濃きゝ、中将ハ衣
をゝのゝどゝ源ハ未
よゝまゝの衣して志
源きまゝ○やれる
ゝる」葵上の悪傷まて
源のやうれのゝゝる
三ノ才九節
面となりの家」源の

あるひきこのまゝねて。やつれるゝゝもゝて
もあるぬゝく ちぞまる ＝三ノ段の才八節ゝ大将の文
とゝ中将とを叙せり。大将ハ
まゝて中将ハ客ゝ。ぱゝのまゝ
りり」とゝあるハ。桐壺の巻ゝて。帝の更衣を歎きまゝ条ゝ
まゝのつぼ弟桐のいとゝ
やうまて」とゝとゝ
桐壺更衣の夢ゝの
のゝくれまゝ
とゝぐれやゝまゝ
の才一節ゝ帝ゝ
とゝゝハ。ぱゝの三ノ段才一節ゝ
ゝ段の十一節ゝ源ゝ
ゝ長恨ゝの
を引て」ゝ
ゝ弟ゝ
ゝ考ゝ
れるまゝみゝなゝめ弟ゝ。

目見ゝ

世五号七

偏ゝまゝを受て中将
ゝみのゝゝゝゝハ葵上
の魂のり方ハゝのゝ
ゝ何ゝゝゝ
ゝゝ○ゝゝゝの命」
ゝゝゝ葵上ゝ
八月の頃ゝゝゝ
ゝ十月ゝゝゝ
けゝゝゝゝ時節の移れ
るを歎きのゝゝかき
くらしゝゝハナリと
いゝ何と源て解ゝ
ゝ○あゝゝゝ」中
将のゝゝブシギニ年
ゝハ源のゝゝあらぬ
ゝ心ゝゝを○院な
どゝゝて」桐壺の源
居立ニ付て源ゝ教訓
ゝゝゝ○ゝゝ
ゝ」ゝ配ゝて○大宝

面となり
ゝゝゝゝゝのうきゝゝゝいつれの
ゝゝとゝまゝて
ゝゝゝゝゝなゝめん。ゆゝゝゝゝやとひとり
源
ゝゝゝ。
ゝゝとゝゝゝゝゝ

のほうこざ由上葵上のほ母大宮ハ源の母伯母ハそほ重縁るれば〇いとほしく〇オキノドクニ〇まことやんどるく和中きこうふ。ことよ思ひまことやんどるく和中きこうふ。ことよ思ひ生霊よ源ハ葵を源く思ひのひ〜よと〜〇いよく〜くちを〜うおぼさる」申れハいよいよ弼会よ思ひ〇ひうりうせぬ」何すもも葵の居のうぬを光るきやうへと申れ痛ん〜のうえ

三小ノ才十節

うまたるきこうそ」の霊枯のうよ弼まる龍膳撫子へ十月のうよん〇苔うれの宮源ぶ

うげるる法けーきなごう。ありへ殺ふなめり。といとほしうゆるをるく〜ひりつ紙。まことやんどるく和中きこうふ。ことよ思ひきこう生殺ふるなめりとつ〜るはいよく〜くちを〜うおぼさる。よろびよつけてひ◎◎◎ひうりうせぬ」何すもも葵の居のうぬを光るきやうへと申れ痛ん〜のうえ

三小段の才九節へ。

こうまたるきこうそ」の霊枯のうよ弼まる龍膳撫子へ十月のうよん〇苔うれの宮源ぶ

大宮よ申りのうえ撫子ハ夕顔かうれ〜秋ハ葵のうへ生ハ葵上の弼〜生てみまのられ〜ものえうれば夕顔を取へとそみまうへ〇木の際ぶりけよ」けハえへ木の際よりまきりてへ〇いまれみての宮くこそハ腐ものきほあれまハ葵のなくるう〜るへやまと接よハあ天へ生ハ今ものえてナカラ〜袖を涙で腐ひとヂヤナア母おやよ別まーやまと接よとと夕顔を表れ〜てよめるへ〇あさうほのうよ」撫の

の天して。

原苔ぶれのまぶきよ弼るなぶ〜しこ紙ものうれ

秋のうへみとそみる。葵ハ花りへまほひおとりてやほ

らんせるらんと申を〜〜。げよなるんる

きほ急へうの伊夕顔のいこうこうほくくしきと」。やあふ

吹風よつけへ前よ。本の際ものりけよもうきほ

るうぶハ。まーてとりあへるいび。

慢いまれみて中く神をくこそとれ一まきほ

あれまーやまとなるでこなほいこうこうれく

なれバ。あさうほのうよ」撫の表ハさりとも

姫父君らでハ此表を知のゝしりとゝ上の一小段ハ第八帝ハ此姫父桃園兵部卿の宮とさゞきそ源をゝ

のゝ〜るよ姫君〇

あゝまし〜ものゝ「源」

權「疎き」なれど〇

さのものゝと「此文がる」

りある紙るものとゝ

〇つまそてこれの意下

の句權ゝよりかけて以

り意ハ美のるゝそて

此夕暮ハつきそて神を

ぬち〜ぬゝるゝのた

めよ物思ひてつらゝの

つ〜秋ハ高〜へなる

れどとゝ〇いつゝ時

雨に引ゝ河海ゝ神

ゝ月いつゝ時雨ハふ

みまり絶らん。とおゝたゝらゝ法ゝ師ゝ

きぶ〜ゝらゝき秘なれどきゝゝ色のゝふ。雨ゝまと

ほけれど。さのゝ月とゝりまゝる法文なれど。

とゝぶゝく〜て。陸奥權の紙ゝ

うゝのゝゝよ。唐紙ゝ

つゝまゝてこれ書ゝゝそ神ゝ書ゝ

秋ハあゝまゝゝへぬれど。いつゝ時雨ゝとあり。法

てゝなゝどのゝとゝぶゝめゝゝこのゝ絶ゝゝるゝ

みゝあゝて。此ゝゝ

權の方女房ゝ

ゝ色。權ゝ

ゝ

廿五号九

りゝのゝどゝく秋ひつ

るゝりハゝゝりゝゝと

ゝゝ〇相ゝうち山

大月山ゝ源ゝゝり

てゝゝゝ山ゝゝ〇ゝ

やゝ引ゝゝ紙ゝゝ

らゝ移ゝゝりゝ深

てゝ〜ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ

檀又は薫香などのめく源よつちきんを見出そのの〜〜〇つれ〜〜ずら檀の姿をいと〜〜〇なほゆゑよしをぎて由所きぎてる美なるハ弟子自立て雑もおもるとえ、帚木巻品定より「おもきざこといふきいふなれバとゝみくたくぐうし」とある反芻をいふ〇つれ〜〜て「京上退屈なるんと源の見いと〇いのぐ見ふちんとゝる」京上いまゝ物えんドなどゝなき程なれバ心易きとゝ

三ノ宮十一節

くれなそぬれど上よ

あ〜〜そしてとおぼそつれぐ〜そこひ〜と思らんよう。とゝとそ〜をりなけまどだぐ

母君やちきき子ん

めおやなきさ〜〜ゆ絵おきさ〜〜んこちしてみぬ

キツカハシク

思どう〜〜ろめ〜〜いつぐおもつらんとおぼ

邑ぬぞそ〜〜ろやをきとどざなりある。三小段の第十節。

大和の文より帝花よ帝を添て大宮〜なりの〜〜さ〜〜。ゆ〜〜檀の姿文をあとつれの〜〜状を叙せり。ひ文〜〜ゆゑ〜〜ゆゑ〜〜つけてだよあの絵ようけ」とみゝ。下の第十二節〜〜「あの絵さそ〜〜思あ〜〜〜〜ゆゑ〜〜ひたる〜〜」とみゝ照応ゑ。「ちらきく程れど」とみゝ。源の第十一節〜〜「くれそぬれバそ」とある前尾ゑ。又「なほゆゑ〜〜」とゝ女〜〜とみれバなるけよひきこめられて「とりちきぶあぐ〜〜をそ〜〜めのちんとゝぐ〜〜」とゝ照応ゑ。

くれなそぬれど思ちちちくやあるらんせ

くらきき程ちれど」とゝ程尾ゑ〇さるべきこのぎりのく〜〜「桑方のく〜〜〇中納言の君桑方の女房ゑ源のかけ路よ人ゑ〇こゝ思ひの程え」桑上のかくれのひ〜〜ろきその源の物思ひのるゑ〇あり〜〜ちけ」桑上の生その学よきさりて〇こゝれこゝるれて」回方よ引ゑとあれどそれもあよをぬるゆ源の氏服の程ゑ〜〜く左大臣殿居の上方よ女房達もゑ何のゑ〜〜〇〜〜が「いきこと」ちるーきとゑ〇いとぐみちなきえ」

かいて。さるべきこのぎりのく〜おもて（源の中納言）〜〜物語などをきを路ゑ中納言の文をといふ。とゝごろ思びおぼ〜ちゑどこの住思ひの程をなかく〜さやうなるきぢぎ（姫君のきぢぎ）ちるけ路ゑ。（中納言ゑ）表なるほんちなとみゝそまつるよ。おほきのこゝはちつ〜〜ちうこゝらひめて。（源氏）ようけ思ゆ。ありー〜〜ようけよ。あれも〜〜まぐ〜〜ぎるこゝれく〜〜ゑれて〜〜ゑ〜〜も法ぬよう〜〜ぐらぶ意〜〜ゑ〜〜ゑ〜〜ゑ

さふらふ女房達の皆泣く。いふかひなきほどとは、葵上のるこの。なごりなきさまよ。今より後は源の殿の御心ばへ何かあるべきと。やがて女房達何も〻やらじ。女房達何も〻泣きつむさはぐ。なごりなく。御なるぎ。源何とそさやうに無き事なるべきと。今なるぎ。葵上なくなりたまふ。あらばかうと。さらぬ人あらばかうと。さらぬ人ぬをみそなんと。命こそ。引かへ命だよんよあるふものならば何か別のあるべきらんと。はかのさと

まくぶ。いとくぶみなきて。いふかひなきほどとは。あぐるまきくらんにもこれだ。さるものまて。なごりなきまはよあくがれたてさせ給ん人祇。思ひのふることそ。とゆ迄もやらじ。哀と。源カナシケレ。なごりなくいとのいとくろなきくもやまもの給ふ。ふるぶ。葵上なくなりたまふ。命こそそあらばみたて給ふん物を。源ふ。うちぬまくるはどぞめでしき。葵の取分て愛。てらうたく志給ひ。葵の召使の女童ちそきこ。ちひさきこのお

○いとらぶそけは。あてきの葵ふまるれて。らぶそげよ思ふ理と。○祇なきたとめ。ちひさきもさあとめ。童の装束なれでと。○くろくそめて。ゆゆの服なれど。人より黒く染めて。只心深きさまと。○あぐさこ。汗衫と。○くくぶざういろ。萱草色と。服者の用る色と。柑子色と大略同じ黄色のまじれると。○ゆゆ。世のなごりなく。葵の時の名残もなく。人ぐまでちりくよ別散しなぐと。○たづきなきもいとよくまさらん

やがもなくいと心ぼそげよ思へるとりまえめて。源あてきふ。今ハ系をそそ思ふべき人なめれとのなくぶ。あてきこ。いとくなく。祇なきなとめ。くろくそめて。くろきなぐこ。くふざういろのハくろくそめて。くろきなぐこ。くふざういろのそのあるどきてるもをなき姿なり。昔を思ふそれざらん人いつまくを志のびてもをきなきん人をみたそびものくぶ。世のなごりなくくぐさんこれなぶ。げきなきもすきぬぐくなんなどこれんなぐるべきことどもを。のあまへどいでやいとく結どほるぞ祈ハ

と云〇いでやいとぐ」イヤマウ何ことのふとも奏の存生の時のやうまハ立入のすまゞとんぼそぞるゝ

三小ノ第十二節

大殿ハ人〳〵」奏の送なと配りのふゝ〇きこゆ〳〵ほゞ〳〵」人の分際ありて差別あるゝ〇つぎとあらぬさ沖」表向形式とそなるくてつゝそきて〇天ハかくて」源のたゞめて系図のさまゝ〇ぐせん」前孤ゝ〇をり志りのほなるしぐれ」表なる折のら時面のゝり出たるさまゝ〇本の袋さそふ

んと思ふよ。いとぐんぼそ〳〵

三小段の第十一節

ゝ左大臣方ゝそ。大方のほ奏ゝそ人〳〵物語の様ゝぱゝ大をうちなぐめ。のゝる」とゝ。上ゝ物語ほとゝぐちちの〳〵まゝらせそとゝそ尾ゝ。

左大臣

大殿ハ人〳〵ゝ。きゝ〳〵ほゞ〳〵をおきつ。チョットレタたゝるきさ

手紙の様ゝ

もてあそび物ども。ゝ。キットレタ袋来侍奏の様ゝまゝとゝ。ゝ。ほゝうゝみなるべきものなゞ。ゝぞとゝらぬさ沖ゝとゝるゝつ。ゝれゝぐゝらせ話ひゝを」。源ゝ天ハうゝそのゝもいのゝでゝはつゝ〳〵ぐゝとゝぞゝ話をんとゝそ。源ゝへまゝゝり話ゝ。ほゝまゝ〳〵生〳〵。ぐせんなゞまゝぬりあゝまゝほゞ。をゝ志ゝをゝほなゝしゝゝれゝうちそゝゝきゝて。ゝの沖ゝをゝゝゝゝ源ゝあゝはゝゝゝゝゝゝ吹

風」上の第十節ゝ。源ゝ吹風ゝつけてだゝ本の袋ゝうけ」とゝ。源ゝ。ゝ。ゝ。ひまあり。つる神」日数ゝて少しのゝきたゝる神をゝぬらゝたゝる。ゝ。ゝうこゝそ」二条源ゝそゝ人ゝ源ゝをゝゝんとゝ。ゝゝゝ」今日ゝ。源ゝらぬゝゝゝれゝど別ゝのゝゝゝゝゝゝ。ゝけふのゝけゝゝゝ」源ゝの沖ゝふゝつけてゝあらゝて然ゝゝゝ。ゝゝの沖ゝ」源ゝゝゝ大ゝゝ沖ゝ清ゝ息ゝゝ。源ゝゝ」源ゝの沖ゝの清ゝ息ゝけふの沖ゝの沖ゝけを沖使ゝ上ゝそ大ゝゝ中

いらひいふゝ。源ゝあゝゝゝゝゝゝ

上てまん○あのらきは
」俄うまん又うりそ
めよのさ○りふま
でちごら〳〵源も いき
とまるまでく笑えし
を今日までちごら〳〵
たまとん○ゆきさせ
んも」源みづうら大やま
まりてすをんハあー
うりちんとん○いとど
しく やあい」侍歌の
甚しきさ侍ん○はは
も泣きさまるちのうまに
侍歌の甚しきさまん
侍涙をのごひのまよ
ひまのちきん○うさ
てすつるん〳〵も」大丞
のさ侍をつまる人〳〵
もあるしきん○世を
おぼす」参議の世を感

よ立丞侍まりけてる。ひふまでなごら人侍り
ふりるよと。みごりんちのこうごきそなんぱを
させんもゆく〳〵よ侍るべられぞそるまるもまる
り侍らぬ。とのれば。いとど志く〳〵哀はめもえ色ぬ
ば。志づ〳〵いりて。侍ぬりもえきこえまん
ば。左大丞殿源の方へ
」おとどぞやうそ
よおぼして。侍神も泣きまるちはべ。こて
まつる人〳〵もいとまるー」。大殿源の矢を世をお
ぼ つづくるといとまぐまて。なきはふさ
侍あれよころふのき物のらいとさ侍ま〳〵

ど〳〵ふ〳〵○あとどひ
さ〳〵」左大丞殿暫時
涙よむせびの〳〵ま
○よまひの侍より」年
老てハ何ともも涙も
ろきよ奏の悲傷そ
源のこのまくまもなき
とま○んをえのどめ
ねば ふ〳〵」ふをとうを
ほりてのまー さをお
しもづむるつのまち
ねぢハ人月も取の
くて〳〵○涙ちどまも
ふ〳〵」参内もせどと
ん○さやうまもむ
けそうせさせの〳〵」左
大丞の出仕なきよ細
を奏聞 のうれとま
○せめて」セマッテ
ふふハ志ひてちど云

猶豫

なまめきの〳〵」。おとどひさ〳〵うめらびの
ひて。左大丞詞よまひの侍もりまはさ〳〵なるまできと
よ侍けてぎよ。涙もろなるぎよ侍るをまて
ひまよなうまひさまへまどそれ侍る。んをえ
のどめ侍らねば。ひとあるいとまぐりぞまく。
んよるきさ侍よ侍るづられば。況などまもえ
まるり侍らぬなり。とのつひぞまはきやう
よおもむけそうをさせの〳〵ぐまる侍る
まぐきを老のまよ。歩参内侍られまるぶつらまる
侍のまとせめて思ひ志びめまその侍ふ意

人〻〇いとうりあり」甚だ道理と〻〇たまるうちつみて」注のふさまと〻〇よのさだ」世のあつひと〻〇さーあくうて」眼あるべく〇おーさらせ」帝のみをおーをうて法ののるふと〻〇さらバ何命ゐ云」上よ志くれうちそーぎて」とみそ尾人今日のけしきをいふと〻〇きぬほどよと」多あぬうちよ事有ーるべと源よのるふと

三ノ宋十三節

うちつみまつー」源氏出のうんとしてそこをえ迴ーのと

色いとうりあり」。源氏えびくさる折のうそ。おくれさぶらひほどのさだめなきふ。世のさだとう絶へ去りなどら。さーはてりておぼ色付るゐまどひ。あくひあるすぐ紀さきまるん」。源氏帝奏ー付らん。おーを法ゐ云」上よ志くれうちそーぎて」。左大臣有きらば時命ゐおらせ絶てんときこと色のふ」。

ひかるく付めゐ。参ぬほどとそくのうーは色のふ」三ゐ段の第十二節と大原て美上の迷物を取りのふ物と。ば迷物取りのと。

と紀ーたるハ。美上の四十九日の法るさ法を出あせと。ゐふと出ハめゐと色のうび」ととゐハ。のゐの出紀きを元人服目と。

うちつみまつー付て。源氏木帳のうーろ陰子の

〇おーこうて」押元ありあひてと〇ひいろ」喪服の色と〻きうちときハ喪の程重まりて長と〇うちきるうれつて」うち泣と〇おぼーまつまきく」夕雾をさーていと〻〇絶ハどや」のふマイカイと〻〇なぐさめ付る紙」左大臣ふみつのうたのみてなぐさめのふと〻〇りふをおきりは」女房だちハ源の今日出のふを限りめやうよ思ひ屈さると〻〇なぐく別きめる」美上ハ別きうてまつりきの形ーびより

あきまるどのあきとなりたるなどよ女房世人だのりおーこうて。こきうときまびいろどもをまつ。これいとうんばそげまそうち出るれつてるあつまりたるをいと長とん絶ふ。おぼーまつぎきくるとりのくれば。

左大臣紙

さりとものいて法いでまハ之よらせ絶ぐぐや。などなぐさめ付る紙。と〻ふ思ひやりなき女房などまを限よおぼーは絶つるあつとおのひくれ去て。なぐく別ぬるのれしびより。ぐ時ぐなれつるうまつる年

源の四るごりを惜むと〇うちとけうち」源ハ桑上の四方まうちとけてまゐ〜まゐとハ侍るなり〜〜とゝ〇あいなたのみ」俗ニ男タヽノミゝ、成分のんごのりよ形むこうゝ〇ゐばそきゝ」眼目ゝ〇みすきのひぬ左大臣ゐ〜て又注ゆ〜ゝ〇いとあさゝゝあるる」源の延喜ゝ左大臣及び女房達の詞を受ていゆゝ〇まことよいのるりとゝ」源桑上のおとけざるとゝ〜とをゆるゆゝ〇陽めのるるをり」源お左大臣大まるどゝ長るのをり

月のるごりなるべき紙。るげき侍るめるなんとゝりなる」。うちとけおゝ〜まゐとハ侍らざりつれど。さりとも つひまゐとあいるだのゝ志侍りつる紙。げまゝそんばそきゆふべ。侍れとそ。又なき孤ひぬ。いとあさるる人〜のるばきゝも侍るるるれ。まゝゝまいあるりとゝもとのどるよ思ひめゝつる沼ヒダどゝ。おのづゝのゝ陽めるゝ〜をりも侍らんを。ゆゝ〜今ふなるをゝるゝゝあおゝりゝ侍らん。今陽ほをゝんらんじゝんとゝ出めふ紙。おゝぐみおゝくり少

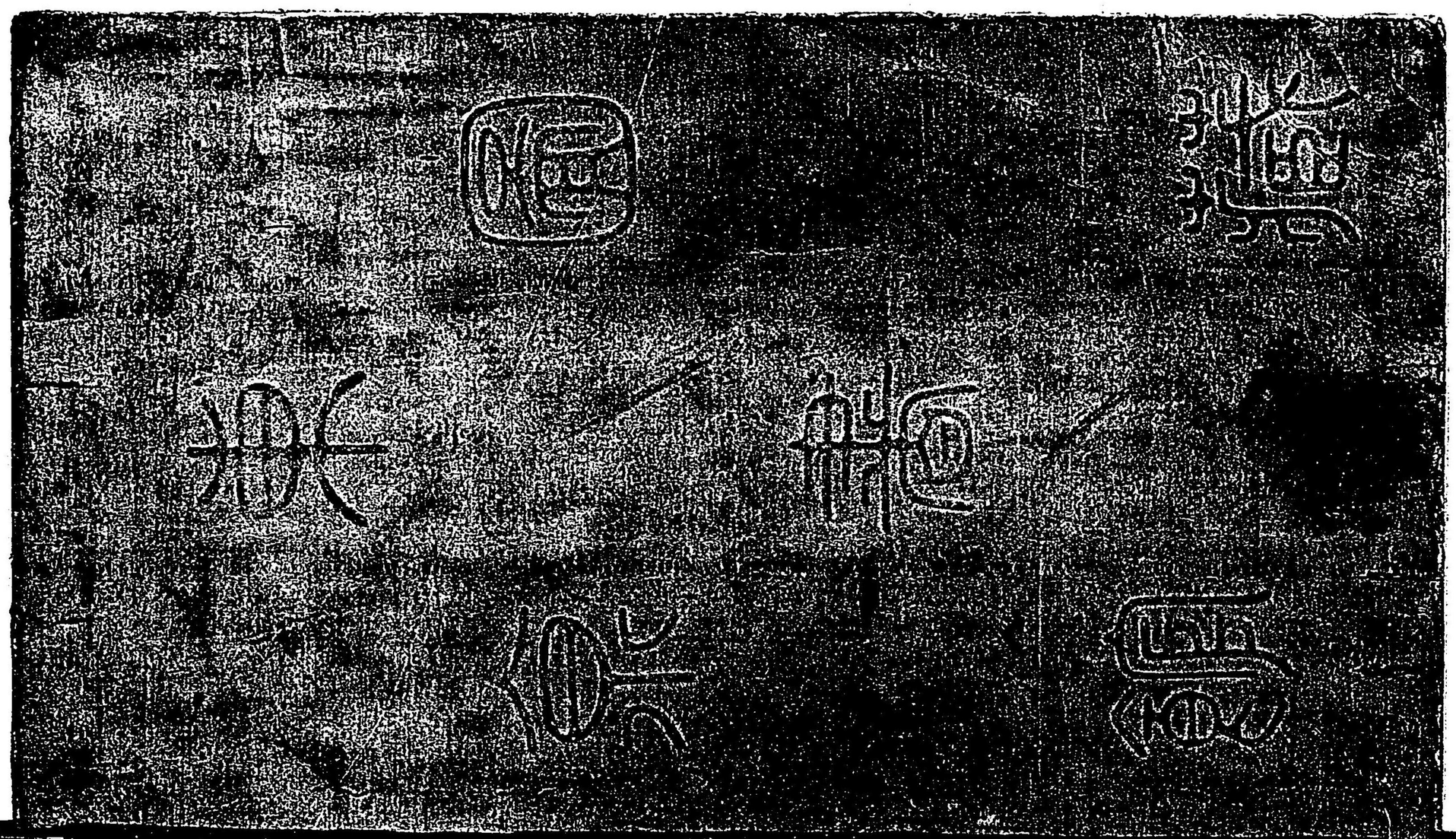
明治十七年五月五日版權免許

定價金十二錢

講義者　東京府士族　鈴木弘恭　小石川區竹早町十三番地

筆記者　三重縣士族　小串隆　麹町區紀尾井町百廿二番地寄留

出版者　東京府平民　柳河梅次郎　日本橋區本町二丁目一番地



源氏物語講義

七葉之巻

大日本教育會藏書館
五十函
四架
七二號
七冊
143